

BEST AVAILABLE COPY

PATENT ABSTRACTS OF JAPAN

(11)Publication number : 60-155111

(43)Date of publication of application : 15.08.1985

(51)Int.Cl.

A61K 9/06

A61K 31/19

(21)Application number : 58-197383

(71)Applicant : HISAMITSU PHARMACEUT CO INC

(22)Date of filing : 20.10.1983

(72)Inventor : NAKAGAWA AKIRA
NAKAO TERUHITO
MIYATA SATORU
YAMAGATA TETSUYA

(54) STABLE PHARMACEUTICAL FOR EXTERNAL USE CONTAINING "KETOPROFEN(R)"

(57)Abstract:

PURPOSE: The titled pharmaceutical for external use, obtained by incorporating an ultraviolet light absorber and if necessary an antioxidant in a pharmaceutical for the external use containing "Ketoprofen", and capable of specifically and remarkably suppressing the photodecomposition of the "Ketoprofen".

CONSTITUTION: A pharmaceutical for external use obtained by incorporating 0.01W5wt%, preferably 0.1W1wt%, based on the total amount of the pharmaceutical, ultraviolet light absorber and if necessary 0.01W5wt%, preferably 0.05W 1wt%, based on the total amount of the pharmaceutical, antioxidant, e.g. ascorbic acid, stearic acid ester or tocopherol, in a pharmaceutical for the external use, e.g. an ointment, gel, fomentation or aerosol, containing "Ketoprofen". A p- aminobenzoic acid derivative, anthranilic acid derivative, benzophenone derivative, salicylic acid derivative, amino acid based compound, etc. may be used as the ultraviolet light absorber, and the benzophenone derivative is particularly preferred.

LEGAL STATUS

[Date of request for examination]

[Date of sending the examiner's decision of rejection]

[Kind of final disposal of application other than the examiner's decision of rejection or application converted registration]

[Date of final disposal for application]

[Patent number]

[Date of registration]

[Number of appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of requesting appeal against examiner's decision of rejection]

[Date of extinction of right]

⑨ 公開特許公報 (A) 昭60:155111

① Int. Cl.

A 61 K 9/06
31/19

識別記号

A B E

庁内整理番号

6742-4C
7330-4C

④ 公開 昭和60年(1985)8月15日

審査請求 未請求 発明の数 2 (全34頁)

⑨ 発明の名称 安定なケトプロフェン含有外用製剤

① 特 願 昭58-197383

② 出 願 昭58(1983)10月20日

③ 発 明 者 中 川 晃 鳥栖市藤木町970番地の11
③ 発 明 者 中 尾 輝 人 鳥栖市真木町字宮の前2102-19
③ 発 明 者 宮 田 悟 鳥栖市西田町103番地
③ 発 明 者 山 形 徹 哉 鳥栖市田代大官町838の4番地
③ 出 願 人 久光製薬株式会社 鳥栖市田代大官町408番地

明 細 書

1. 発明の名称

安定なケトプロフェン含有外用製剤

2. 特許請求の範囲

1. ケトプロフェンを含有する外用製剤に紫外線吸収剤を配合することを特徴とする安定なケトプロフェン含有外用製剤。

2. ケトプロフェンを含有する外用製剤に紫外線吸収剤と抗酸化剤の両者を配合することを特徴とする安定なケトプロフェン含有外用製剤。

3. 紫外線吸収剤がローアミド安息香酸誘導体、アントラニル酸誘導体、サリチル酸誘導体、桂皮酸誘導体、ベンゾフェノン誘導体、クマリン誘導体、アミノ酸系化合物からなる特許請求の範囲第1項記載又は第2項記載のケトプロフェン含有外用製剤。

4. 紫外線吸収剤がベンゾフェノン誘導体である特許請求の範囲第1項記載又は第2項記載のケトプロフェン含有外用製剤。

5. ベンゾフェノン誘導体が2,2'-ジヒドロキシ-4,4'-ジメトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-オクトキシベンゾフェノン、2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸、4-フェニルベンゾフェノン-2-カルボン酸、イソオクテルエステル、2-ヒドロキシベンゾフェノン、2,4-ジヒドロキシベンゾフェノン、2,2'-4,4'-テトラヒドロキシベンゾフェノンからなる特許請求の範囲第3項又は第4項記載のケトプロフェン含有外用製剤。

3. 発明の詳細な説明

本発明は安定なケトプロフェン含有外用製剤に係り、特にケトプロフェンを含有する外用製剤に紫外線吸収剤を配合することを特徴とする安定な外用製剤に関するものである。

更にはこれに加えて必要に応じ抗酸化剤を配合することを特徴とする安定な外用製剤に関するも

のである。

ケトプロフェンは優れた抗炎症作用および鎮痛作用を有する非ステロイド性消炎鎮痛剤であり、経口剤、坐剤および注射剤等の製剤形態において慢性関節リウマチ、変形性関節症、外傷ならびに手術後の鎮痛消炎及びその他の各外科領域の炎症性疾患等の治療に汎用されている薬物である。

しかし、前記した製剤形態においては、胃腸、肝、腎臓等への副作用の発現があり、継続的使用には問題を残している。そこで、軟膏剤、ゲル剤、クリーム剤、湿布剤、貼付剤等の外用製剤の開発研究が検討されているが、製剤自体の安定性及び薬効成分であるケトプロフェンに対する安定性の検討はまだ十分なものではなく、満足しうる安定な外用製剤の完成には至っていないのが現状である。

即ち、ケトプロフェンにおいてはその錠剤を日光下に放置しても経時変化は少く安定であるのに対し、外用の製剤形態では経時変化が激しく非常に不安定であることが明らかである。尚、その

原因を本願発明者が検討したところ、ケトプロフェン自体が光に非常に不安定であり、錠剤の形態においては幾層にもコーティングされ、光の影響を受けにくいのが、これに対して外用製剤は直接的、又は間接的に光の影響を受けやすいものであろうと考察された。

又、ケトプロフェンはこの光の影響により、3-エチルベンゾフェノン及び3-アセチルベンゾフェノンの二つの副生成物を生じることも明らかとなった。

但し、この前記二つの副生成物は製剤の安定性、使用感及び着色に対する影響が多量であり、又、皮膚アレルギーの原因の一つに挙げられるものである。そこで本願発明者はケトプロフェン含有外用製剤における上記の欠点を解消すべく鋭意研究を重ね本願発明の安定な外用製剤を完成するに至ったものである。即ち、本願発明の目的は安定なケトプロフェン含有外用製剤を提供することにある。

本願発明はベンゾフェノン誘導体に代表される

紫外線吸収剤並びに必要に応じ、抗酸化剤をケトプロフェン含有外用製剤に配合することにより、ケトプロフェンの光分解が特異的且つ顯著に抑制されるという新規知見に基づき完成されたものである。

即、本願発明はケトプロフェンを含有する外用製剤（例えば軟膏剤、ゲル剤、クリーム剤、湿布剤、貼付剤、坐剤、リネメント剤、点眼剤、エアゾール剤等を含む）に紫外線吸収剤、例えばp-アミノ安息香酸誘導体、アントラニル酸誘導体、サリチル酸誘導体、桂皮酸誘導体、ベンゾフェノン誘導体、クマリン誘導体、アミノ酸系化合物及びその他の紫外線吸収剤等々を配合することを特徴とするものである。

更に詳細には、p-アミノ安息香酸誘導体としては、p-アミノ安息香酸、p-アミノ安息香酸のエチル、プロピル、ブチル、イソブチル、モノグリセリン等の各種エステル、p-ジメチルアミノ安息香酸及びエチル又はアミル等のエステル、p-ジエチルアミノ安息香酸及びエチル又はアミ

ル等のエステル、p-ジメチルアミノ安息香酸2-エチルヘキシルエステル等を、又アントラニル酸誘導体としては、アントラニル酸のエステル誘導体、その中でも特にアントラニル酸メチルエステル等が挙げられる。サリチル酸誘導体としては、エステル誘導体が好ましく、その中でもサリチル酸のノンチル、ホモノンチル、エチレンジリコール、グリセリン、2-エチルヘキシル、トリブチル、ボルニル、フェニル等の各エステル体及びサリチル酸のトリエタノールアンモニウム塩等を、桂皮酸誘導体としては、シネキサート、p-メトキシ桂皮酸ジエタノールアミン、p-メトキシ桂皮酸2-エチルヘキシルエステル、p-アセトアミド桂皮酸イソブチルエステル等を、ベンゾフェノン誘導体としては、2,2'-ジヒドロキシ-4,4'-ジメトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン

5-スルホン酸、4-フェニルベンゾフェノン-2-カルボン酸-イソオクタールエステル、2-ヒドロキシベンゾフェノン、2,4-ジヒドロキシベンゾフェノン、2,6-4,4'-テトラヒドロキシベンゾフェノン等が挙げられる。クマリン誘導体としては、7-エチルアノ-4-メチルクマリン、7,8-ジヒドロキシクマリン、6,7-ジヒドロキシクマリン、7-ヒドロキシクマリン、4-メチル-7-ヒドロキシクマリン等を、アミノ酸系化合物としては、ウロカニン酸、トリプタミン誘導体、グルタミン酸誘導体等を、又その他の紫外線吸収剤としては、ベンゾトリアゾール誘導体、イミダゾリン誘導体、ピリジン誘導体、テトラゾール誘導体、ジオキサン誘導体、フラン誘導体、ピロン誘導体、カンファー誘導体、抗酸誘導体、アラントイン誘導体、ニコチン酸誘導体、シコニンあるいはビタミンB₆誘導体等が挙げられる。

尚、配合される紫外線吸収剤としてはベンゾフェノン誘導体が特に好ましい。

更に、本願発明はケトプロフェンを含有する外

用製剤に前記した紫外線吸収剤に加えて、必要に応じて抗酸化剤を配合することでもできるものである。

尚、抗酸化剤としては、例えばアルコルビン酸ステアリン酸エステル、アスコルビン酸ナトリウム、トコフェロール（例えばα-トコフェロール、β-トコフェロール、γ-トコフェロール、δ-トコフェロール等の4体、5体、6体）およびこれらのエステル誘導体、ノルジヒドログアリン酸、ジブチルヒドロキシルエーテル、ブチルヒドロキシアニソール、tert-ブチルヒドロキノン浸食子酸エステル（エチル、プロピル、イソamil等のエステル）、1-オキソ-3-メチル-4-ニソプロピルベンゼン等が挙げられる。前記抗酸化剤は紫外線吸収剤と併用して配合することにより、ケトプロフェンの光分解は一層抑制され、非常に安定な外用製剤が得られるものである。

次に、配合量について述べる。紫外線吸収剤は外用製剤の全重量100重量%に対して0.01～5重量%、好ましくは0.1～1重量%配合され

る。又、抗酸化剤は外用製剤の全重量100重量%に対して0.01～5重量%、好ましくは0.05～1重量%配合される。

以上詳述した如く、本願発明はケトプロフェンを有効成分として含有する外用製剤、例えば軟膏、ゲル剤、クリーム剤、湿布剤、貼付剤、坐剤、リニメント剤、点眼剤、エアゾール剤等に前記した紫外線吸収剤、及び必要に応じて抗酸化剤を配合することを特徴とするもので、これにより前記した本願発明の目的を達することができるものである。

尚、ここで前述の外用製剤の各々について、本願発明の処方例を示す。

まず、軟膏剤について説明する。軟膏基剤は公知あるいは通常使用されているものの中より選択されるが、例えば、高級脂肪酸又はそれらのエステル類（例：ミリスチン酸、パルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸、ミリスチン酸エステル、パルミチン酸エステル、セバシン酸ジエチル、ステアリン酸ヘキシル、イソオクタノ酸セチル等）

ロウ類（例：蜂ロウ、ミツロウ、セチレン等）、界面活性剤（例：ポリオキシエチレンアルキルエーテルリン酸エステル等）、高級アルコール（例：セチルアルコール、ステアリルアルコール、セトステアリルアルコール等）、シリコン油（例：ジメチルポリシロキサン、オクチルフェニルポリシロキサン、トリコロメチルポリシロキサン、シリコングリコールポリマー等）、炭化水素類（例：鉱水ワセリン、白色ワセリン、精製ラノリン、流動パラフィン等）、水、吸収促進剤（例：炭酸プロピレン、ジイソプロピルアジバート、クロタミドン等）、保湿剤（例：グリセリン、プロピレングリコール、ブチレングリコール、ソルビトール等）から選択されることが好ましい。

以上の各基剤に有効成分であるケトプロフェンを配合し、更に本願発明の特徴である紫外線吸収剤、及び必要に応じて抗酸化剤を適宜配合することにより、本願発明の軟膏剤を得ることができるものである。

次に軟膏剤の製造例の一つを述べ参考にする。

る。

高級脂肪酸エステル5～15重量%、界面活性剤1～10重量%にケトプロフェン0.5～10重量%、紫外線吸収剤0.01～5重量%又は必要に応じ抗酸化剤0.01～5重量%を室温又は加温下に混合し、ロウ類4～10重量%、炭化水素50～90重量%を加え加温又は加熱融解し、50～100℃に保つ。全成分が透明溶解液となった後ホモキナーで均一に混和する。その後、攪拌しながら室温下迄下げることにより本願発明の軟膏剤が得られる。尚、上記の製造例は一例にすぎず公知又はこれに類似の方法及び処方により製造しうることは言う迄もない。又、各配合物の配合順序等も特に限定されるものでない。(以下、各種製剤の処方例、製造例にこれは共通するものである)

次に、ゲル剤について述べる。ゲル基剤は公知あるいは通常使用される各種基剤から選択されるが、例えば、低級アルコール(例：エタノール、イソプロピルアルコール等)、水、ゲル化剤(例

：カルボキシビニル重合体、ヒドロキシエチルセルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、メチルセルロース、エチルセルロース、カルボキシメチルセルロース、アルギン酸プロピレングリコールエステル等)、中和剤(例：トリエタノールアミン、ジソプロパノールアミン、水酸化ナトリウム等)、界面活性剤(例：セスキオレイン酸ソルビタン、トリオレイン酸ソルビタン、モノオレイン酸ソルビタン、モノステアリン酸ソルビタン、モノラウリン酸ソルビタン、モノステアリン酸ポリエチレングリコール、ポリオキシエチレンノニルフェニルエーテル、ポリオキシエチレンセチルエーテル、ポリオキシエチレンラウリルエーテル等)、吸収促進剤(例：炭酸プロピレン、ジエチルセバケート、ジソプロピルアジベート等)が挙げられる。以上の各基剤に薬効成分であるケトプロフェンを加え、そして紫外線吸収剤、又は必要に応じ抗酸化剤を適宜配合することにより本願発明のゲル剤を得ることができる。

ここでゲル剤の製造例の一つを示す。

(A) 水5.5重量%以下にゲル化剤0.5～5重量%を加えて膨潤させ、一方(B) ケトプロフェン0.5～10重量%及び紫外線吸収剤0.01～5重量%、又は必要に応じ抗酸化剤0.01～5重量%を溶解剤に溶解、もしくは懸濁し、更にこれをグリコール類40重量%以下と低級アルコール60重量%以下の混合物に溶解し、次いで(B)を(A)に加えて中和剤を添加し、pHが5～7になるよう調整することにより本願発明のゲル剤が得られる。

次に、クリーム剤について述べる。クリーム基剤は公知あるいは通常使用される各種基剤から選択されるが、例えば高級脂肪酸エステル類(例：ミリスチン酸エステル、パルミチン酸エステル、セバシン酸ジエチル、ラウリン酸ヘキシル、イソオクタン酸セチル等)、低級アルコール(例：エタノール、イソプロパノール等)、乳化剤(例：ポリオキシエチレンアルキルエーテル類、脂肪酸エステル類、ポリエチレングリコール脂肪酸エステル等)、防腐剤(例：パラオキシ安息香酸エス

テル)、吸収促進剤(例：炭酸プロピレン、ジエチルセバケート、ジソプロピルアジベート、クロタミトン等)が挙げられる。以上の各基剤に薬効成分であるケトプロフェンを加え、更に紫外線吸収剤、又は必要に応じ抗酸化剤を適宜配合することにより本願発明のクリーム剤を得ることができる。又、クリーム剤とゲル剤の中間の性質を有するゲル状クリーム剤とする為には、上記のクリーム剤にゲル化剤(例：カルボキシビニル重合体、ヒドロキシエチルセルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、エチルセルロース、カルボキシメチルセルロース等)、及び中和剤(例：トリエタノールアミン、水酸化ナトリウム等)を加え、pH値4～8、好ましくは5～6.5に調整することにより本願発明のゲル状クリーム剤を得ることができる。

以下、ゲル状クリーム剤の製造例の一つを示す。

(A) ケトプロフェン0.5～10重量%、紫外線吸収剤0.01～5重量%、又は必要に応じ抗酸化剤0.01～5重量%を高級脂肪酸エステル2.5重

量%以下と低級アルコール40重量%以下の混合物に溶解し、更に防腐剤0.5重量%以下、乳化剤5重量%以下を加える。一方、(B)水にゲル化剤0.5～5重量%を加えて膨潤させ、次いで(B)を(A)に加えてホモミキサーで均一に乳化させ、乳化後中和剤を添加し、pH値を4～8に調整すると本願発明のゲル状クリーム剤が得られる。

次に、湿布剤について述べる。湿布基剤、例えば増粘剤(例：ポリアクリル酸ソーダ、ポリアクリル酸、ポバール、ポリビニルピロリドン、ポリエチレンオキシド、ポリビニルメタアクリレート等の合成水溶性高分子、アラビアゴム、デンプン、ゼラチン等の天然物、メチルセルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、アルギン酸、アルギン酸アンモニウム、カルボキシメチルセルロースナトリウム等)、保湿剤(例：グリセリン、プロピレングリコール、ブチレングリコール、ソルビトール等)、充量剤(例：カオリン、酸化亜鉛、タルク、チタニウム、ベンザイト等)、水、溶解補助剤(例：炭酸プロピレン、クロタミトン、ジオソ

プロピルアジベート等)、粘着付与剤(例：ロジン、エステルガム、ポリブテン等)等から選択された各基剤に薬効成分であるケトプロフェンを加え、更に紫外線吸収剤、又は必要に応じて抗酸化剤を適宜配合することにより本願発明の湿布剤を得ることができる。

次に、湿布剤の製造例の一つを示す。

(A) ケトプロフェン0.5～1.0重量%、紫外線吸収剤0.01～5重量%、又は必要に応じて抗酸化剤0.05～5重量%を溶解補助剤0.5～8重量%と混合溶解し均一なものとする。次に(B)増粘剤5～20重量%、絆ましくは1.0～1.5重量%を保湿剤5～40重量%、水10～80重量%に混合分散溶解し、充量剤2.0重量%以下を加え均一な混合物とする。次いで(A)を(B)に加え混合し、均一な混合物を得る。この混合物を通常の方法で支持体上に展延塗布した後、その上に制限被覆物を貼付することにより本願発明の湿布剤が得られる。尚、支持体には布地、不織布、不織紙等から、制限被覆物はポリエチレン、ポリブ

ロピレン、塩化ビニル、シリコン加工紙等から適宜選択される。

次に、貼付剤について述べる。貼付剤用基剤は公知の高分子基剤(例：メタアクリル酸エステル類、アクリルニトリル、酢酸ビニル、プロピオン酸ビニル等のビニルモノマーとの共重合物であるアクリル系重合体、シリコーン樹脂、ポリイソブレンゴム、ポリイソプレンゴム、天然ゴム、アクリルゴム、ステレン-ブタジエン-スチレンブロック共重合体、ステレン-イソブレン-スチレンブロック共重合体等)、油脂又は高級脂肪酸(例：アーモンド油、オリーブ油、ツバキ油、パーム油、ラッカセイ油、オレイン酸、流動パラフィン等)、粘着付与剤(例：ロジン、ナジニ酸、マレイン酸、水添ロジンエステル等)から選択され、当該基剤にその他の添加物(例：dl-カンフル、4-メントール、チモール、ノニル酸ワニルアミド、トウガラシタンキ等)を加え、薬効成分であるケトプロフェンを配合し、更に紫外線吸収剤、又は必要に応じて抗酸化剤を適宜配合し、

これを支持体(例：ポリプロピレン、ポリエステル、ビニル塩化ビニリデン、ポリアクリル、ポリウレタン、エチレン-酢酸ビニル共重合体、布、不織布、不織紙等)に展延塗布した後、その上に制限被覆物を貼付することにより本願発明の貼付剤を得ることができる。尚、貼付剤の製造は通常公知の方法に準じて簡単にこなせるものであり、又、配合組成は公知の冷感又は温感貼付薬における薬効成分(例：サリチル酸メチル、サリチル酸グリコール等)をケトプロフェン0.5～1.0重量%に置換し更に紫外線吸収剤0.01～5重量%又は必要に応じて抗酸化剤0.01～5重量%を配合することにより本願発明の貼付剤を得ることができる。

次に、坐薬について述べる。坐薬用基剤は例えば、カカオ脂、水素添加ラッカセイ油、水素添加ヤシ油等の合成油脂性基剤、ポリエチレングリコール類、モノレン、ツウイン、アルロニック等の水溶性基剤から選択され、当該基剤に薬効成分であるケトプロフェン0.5～1.0重量%、紫外線吸収剤0.01～5重量%、更に必要に応じて抗酸化剤

0.01～5重量%配合することにより、本願発明のケトプロフェン含有坐薬製剤を得ることができる。

次にリニメント剤について述べる。本願発明のリニメント剤はアルコール類(例:エタノール、プロパノール、イソプロパノール等の1価のアルコール、ポリエチレングリコール、プロピレングリコール、ブチレングリコール等の多価アルコール等)、1.0～7.0重量%、水55重量%以下、脂肪族エステル(例:アジピン酸、セバチン酸、ミリスチン酸の各種エステル等)、5.0重量%以下、に薬効成分であるケトプロフェン0.5～1.0重量%を加え、更に紫外線吸収剤0.01～5重量%、必要に応じ抗酸化剤0.01～5重量%配合することにより本願発明のリニメント剤を得ることができる。

尚、上記処方例及び製造例は単なる一例であり、当然公知のリニメントの製造法で本願発明のリニメント剤を得ることができるものである。又、配合組成においても公知のリニメント剤の薬効成分

をケトプロフェンに置換し、それに紫外線吸収剤を配合することにより、簡単に本願発明のリニメント剤を得ることができる。尚、本願発明のリニメント剤において必要に応じpH調整の為の中和剤あるいはメチルセルロース、カルボキシビニルポリマー、ヒドロキシプロピルセルロース等の粘性付与剤を配合することもある。

又、点眼剤及びエアゾール剤等においても、紫外線吸収剤0.01～5重量%、又は必要に応じ抗酸化剤0.01～5重量%を配合することにより本願発明の点眼剤、エアゾール剤を得ることができる。

尚、これらの製造方法は従来公知の方法で十分であり、又配合組成は公知の製剤における薬効成分をケトプロフェンに置換し、それに紫外線吸収剤、又は必要に応じ抗酸化剤を配合することにより本願発明の前記製剤を得ることができる。

以上詳述した如く、本願発明はケトプロフェン含有の外用製剤に、紫外線吸収剤及び必要に応じ抗酸化剤を配合することとを特徴とするものであ

るが、本願発明によると有効成分であるケトプロフェンの光分解を防止できるので下記のような効果を有するものである。

1. 光の影響によって発生する分解物が著しく抑制される。
2. 着色防止効果が顕著である。
3. かゆみ、かぶれ及びその他の皮膚アレルギー等の副作用が著しく緩和される。
4. 皮膚吸収による皮膚毒性が低くなる。
5. 光照射における皮膚損傷等の副作用が著しく緩和される。
6. 長期間保存しても製剤が安定に保たれ、変質することがなく、且つ使用感等が最初の状態で常に保たれる。

尚、ここで本願発明に関連する従来技術について説明すると、ケトプロフェンを含有する外用製剤において紫外線吸収剤又は必要に応じ抗酸化剤を配合した例、又はそれを示唆した例は世界になく、安定化という目的の為にこれを配合したのは本願発明者が最初になし得たことである。

以下、前述した本願発明の効果をさらに説明する為、試験例を、又本願発明を更に具体的に説明する為、実施例を示す。

試験例1

2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン
の配合量が0%、0.1%、0.2%、0.5%、1.0重量%のゲル剤を実施例1に記載された方法で得た。これらのゲル剤をガラス板に薄く塗布したのち、直射日光が十分に照射する場所へ放置し、8時間後のケトプロフェンの残存量を液体クロマトグラフィーによって測定した。その結果を表1に示す。

表 1

ゲル剤の種類	ケトプロフェンの残存量
0.1% 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合のゲル剤	23%
0.1% 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合のゲル剤	29%
0.2% 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合のゲル剤	44%
0.5% 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合のゲル剤	74%
1.0% 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合のゲル剤	90%

試験例 2

後述する実施例 1 のゲル剤と、実施例 1 に記載の方法と同様の方法で製造した 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合していないゲル剤を、各々透明のガラス容器に入れ日光に於て、1 日、3 日、5 日、7 日間後の着色の度合いを観察した。その結果を表 2 に示す。

表 2

試料 期間	実施例 1 のゲル剤	2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合していないゲル剤
1 日	変化なし	微黄色
3 日	変化なし	黄色
5 日	変化なし	黄色
7 日	微黄色	黄褐色

試験例 3

実施例 1, 6 に記載の方法と同様の方法で、ジノキサート、2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、アジラニル酸メチル、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、p-ジオキソニルアミン安息香酸メチル、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸、サリチル酸フェニルの各種紫外線吸収剤を 1.0 重量% 配合した各種軟膏剤、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン及びアトコフェノール各 1.0 重量% 配合した軟膏剤、紫外線吸収剤又は抗酸化剤を配合しない軟膏剤を得た。これらを室温にて室内（直射日光を受けない場所）に 1 週間放置しその後ケトプロフェンの残存量を液体クロマトグラフィーによって測定した。その結果を表 3 に示す。

表 3

軟膏剤の種類	ケトプロフェンの残存量(%)
ジノキサート配合の軟膏剤	73
2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合の軟膏剤	83
アジラニル酸メチル配合の軟膏剤	63
2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合の軟膏剤	87
p-ジオキソニルアミン安息香酸メチル配合の軟膏剤	64
2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸配合の軟膏剤	86
サリチル酸フェニル配合の軟膏剤	65
2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン及びアトコフェノール配合の軟膏剤	95
紫外線吸収剤及び抗酸化剤を全く配合していない軟膏剤	51

実施例 1

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光 104：和光純薬工業特製）2部を精製水2.5部に膨潤させた。これに、エチルアルコール4.0部及びジソプロピルアジベート2部にケトプロフェン3部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部を溶解した溶液を加え攪拌した。更に、これにヒドロキシプロピルセルロース2部をプロピレングリコール1.5部に溶解したものを加え攪拌した後、ジソプロパノールアミン2.5部を精製水8部に溶解したものを加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例 2

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光 104：和光純薬工業特製）1.5部を精製水2.5.1部に膨潤させた。これにエチルアルコール2.0部及び炭酸プロピレン1.0部にケトプロフェン1部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.2部を溶解した溶液を加え攪拌した。さらにヒ

ドロキシプロピルセルロース2部をプロピレングリコール3.0部に溶解したものを加えて攪拌した後、トリエタノールアミン0.2部を精製水1.0部に溶解したものを加え全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例 3

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光 104：和光純薬工業特製）2.5部を精製水2.1部に膨潤させた。これにエチルアルコール4.0部及びジソプロピルアジベート3部にケトプロフェン5部及びベンゾレスノール1.0部を溶解した溶液を加え攪拌した。更にヒドロキシプロピルセルロース1部を1.3-ブチレングリコール1.5部に溶解したものを加えて攪拌した後、ジソプロパノールアミン3部を精製水8.5部に溶解したものを加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例 4

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光 104：和光純薬工業特製）2部を精製水2.1部に膨潤させた。これにエチルアルコール4.3部及びジソプロピルアジベート3部にケトプロフェン2部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、更にアードコフェロール1.0部を溶解した溶液を加え攪拌した。更にヒドロキシプロピルセルロース2部をプロピレングリコール1.6部に溶解したものを加え攪拌後、ジソプロパノールアミン2.5部を精製水7部に溶解したものを加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例 5

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光 104：和光純薬工業特製）2.5部を精製水1.8部に膨潤させた。これにエタノール4.3部及びクロタミド3部にケトプロフェン3部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部を溶解

した溶液を加え攪拌した。更にヒドロキシプロピルセルロース1部を1.3-ブチレングリコール1.5部に溶解したものを加えて攪拌した後、ジソプロパノールアミン3部を精製水10.8部に溶解したものを加え、更にジブチルヒドロキシアニソール0.2部を加え全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例 6

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光 104：和光純薬工業特製）1部を精製水2.5部に膨潤させた。これにエタノール4.0部、プロピレングリコール1.0部及びケトプロフェン1部、更に2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部を溶解した溶液を加え攪拌した。次にジソプロパノールアミン1.1部を精製水2.2.4部に溶解したものを加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例7

カルボキシビニルポリマー〔ハイビス和光104：和光純薬工業製〕2.2部を精製水30部に溶解させた。これにエチルアルコール3.5部及びジソプロピルアジベート3部にケトプロフェン3部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部及びジブチルヒドロキシトルエン0.1部を溶解した溶液を加え攪拌した。

更に、これにヒドロキシプロピルセルロース1部をプロピレングリコール1.3部に溶解したものを加え攪拌した後、ジソプロパノールアミン3部を精製水9.2部に溶解したものを加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例8

ケトプロフェン7部をエタノール5.2部に溶解せしめ、その中に2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部を加えた。次にジソプロピルアジベート4.0部を加え、全体が均一になるよ

う十分に攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例9

ケトプロフェン1部をエタノール3.8部に溶解し、その中に2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、プロピレングリコール1.2部、メチルセルロース0.8部及びセバチン酸ジエチル2部を加え十分に攪拌分散を行なった。これに水酸化カリウム0.07部を精製水4.5.1部に溶解した溶液を攪拌しながら加え、全体が均一になるまで攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例10

ケトプロフェン3部をエタノール4.0部に溶解し、その中にベンゾルゾルシノール1部、ブチレングリコール1.0部、セバチン酸ジエチル2部、メチルセルロース0.8部を加え十分に攪拌分散を行なった。これに水酸化カリウム0.07部を精製水4.4.1部に溶解した溶液を攪拌しながら加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛リニ

メント剤を得た。

実施例11

ケトプロフェン2部をエタノール4.9部に溶解し、その中に2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.6部、アジピン酸ジイソプロピル3.0部、トートコフェロール1部及びヒドロキシプロピルセルロース1.5部を加えて攪拌分散させ、更に、これに水1.5.9部を加え、全体が均一になるまで攪拌して消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例12

ケトプロフェン0.5部、プロピレングリコール1.0部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.2部、モノラウリン酸ポリエチレングリコール(10 E. O.) 1.0部、クロタミトン0.5部にアセトン2.0部、エチルアルコール2.0部を加えてケトプロフェンを溶解したのち、水1.0部を加え、更にエタノールを加えて全量を1.0.0部とし、消炎鎮痛リニメント剤を作った。

実施例13

ケトプロフェン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、トートコフェロール1部、クロタミトン1部及びポリエチレングリコール4.0.0.10部にエタノール5.0部を加えてケトプロフェンを溶解したのち、水5部を加え、更にイソプロピルアルコールを加えて全量を100部とし、消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例14

ケトプロフェン2部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.7部、モノラウリン酸ポリエチレングリコール(10 E. O.) 1.5部、クロタミトン2部、アジピン酸ジイソプロピル4部に、8-アセチル化底脂定性アルコールを加えて全量を1.0.0部とし、消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例15

ケトプロフェン1部、プロピレングリコール

10部および2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部にエタノール70部を加えケトプロフェンを溶解したのち、水5部を加え、更にエタノールを加えて全量を100部とし、消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例 16

ケトプロフェン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、セバシン酸ジエチル10部、鯨ロウ5部、ポリオキシエチレンラウリルエーテルリン酸ナトリウム2部、白色ワセリン81.45部、パラオキシ安息香酸ブチル0.05部を混合し、加熱融解して40～100℃に保った。透明融解液となった後、ホモミキサで全体が均一になるよう混合した。その後攪拌しながら室温まで冷却して油性の消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 17

ケトプロフェン3部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部、γ-トコフェロール

酸ブチル0.05部を混合した。以下、実施例16と同様な方法で消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 20

(A)：ケトプロフェン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、ステアリアルアルコール4部、流動パラフィン4部、セタノール4部、白色ワセリン15部、ポリオキシエチレンセチルエーテル2部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合し、加熱融解して40～100℃に保った。

一方、(B)：水58.8部を40～100℃に保ち、(A)の融解液を(B)に加えホモミキサで全体が均一になるまで攪拌混合し、乳化した。乳化後、よく攪拌しながら室温まで冷却して乳剤性基剤の消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 21

(A)：ケトプロフェン3部、2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部、γ-トコ

1部、セバシン酸ジエチル10部、鯨ロウ5部、ポリオキシエチレンラウリルエーテルリン酸ナトリウム4部、白色ワセリン75.95部、パラオキシ安息香酸ブチル0.05部を混合した。以下、実施例16と同様な方法で消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 18

ケトプロフェン1部、2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、ミリスチン酸イソプロピル10部、鯨ロウ4部、ポリオキシエチレンラウリルエーテルリン酸ナトリウム2部、白色ワセリン82.5部を混合した。以下、実施例16と同様な方法で消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 19

ケトプロフェン5部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸1部、セバシン酸ジエチル10部、鯨ロウ5部、ポリオキシエチレンラウリルエーテルリン酸ナトリウム5部、白色ワセリン73.95部、パラオキシ安息香

フェロール1部、セトステアリアルアルコール10部、流動パラフィン5部、白色ワセリン10部、ポリオキシエチレンラウリルエーテル2.5部、ポリオキシ安息香酸メチル0.2部を混合し、加熱融解して40～100℃に保った。

一方、(B)：水67.3部を40～100℃に保ち、(A)の融解液を(B)に加えホモミキサで全体が均一になるまで攪拌混合し、乳化した。乳化後、よく攪拌しながら室温まで冷却して乳剤性基剤の消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 22

(A)：ケトプロフェン5部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸0.8部、セタノール4部、ステアリアルアルコール4部、白色ワセリン15部、流動パラフィン4部、ポリオキシエチレンセチルエーテル2部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合し、加熱融解して40～100℃に保った。

一方、(B)：水65部を40～100℃に保

ち、(A)の融解液を(B)に加えホモミキサーで全体が均一になるまで攪拌混合し、乳化する。乳化後、よく攪拌しながら室温まで冷却して乳剤性基剤の消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 23

(A)：ケトプロフェン1部、シノキサート0.8部、ジ-tert-ブチルヒドロキシトルエン0.5部、セタノール4部、白色ワセリン10部、流動パラフィン7部、ポリオキシエチレンオレイルエーテル2部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合し、加熱融解して40～100℃に保った。

一方、(B)：水69.5部を40～100℃に保ち、(A)の融解液を(B)に加えホモミキサーで全体が均一になるまで攪拌混合し、乳化する。乳化後、よく攪拌しながら室温まで冷却して乳剤性基剤の消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 24

カルボキシニルポリマー（カーボボル94

ー4-メトキシベンゾフェノン0.2部及びアートコフェロール0.5部を混合し、これにケトプロフェン1部を溶解した後、更に、ポリオキシエチレンセチルエーテル（ニッコールBC-20TX（日光ケミカルズ社製））2部、炭酸プロピレン10部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合した。これに前記の水を膨潤させたカルボキシニルポリマーに添加し、ホモミキサーで均一に乳化した。乳化後、水酸化ナトリウム0.1部を水10部に溶解したものを添加し、全体が均一になるまで十分に攪拌して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例 25

ケトプロフェン1部をグリセリン5部に懸濁し、カルボキシニルポリマー（カーボボル940（グッドリッチケミカル社製））1部、精製水92.1部を加えて攪拌、膨潤させた後、ジイソプロパノールアミン0.4部を加えて乳化させた。これに中鎖脂肪酸トリグリセリド（ODO、日清製油社製）3部及び2-ヒドロキシ-4-メ

0（グッドリッチケミカル社製）1部を水65部に膨潤させた。一方、ミリスチン酸イソプロピル10部とエタノール5部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.8部を混合し、これにケトプロフェン3部を溶解した後、更に、ポリエチレングリコールモノステアレート（ニッコールMYS-40（日光ケミカルズ社製））1部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合した。これを前記の水を膨潤させたカルボキシニルポリマーに添加し、ホモミキサーで均一に乳化した。乳化後、ヤシ油脂肪酸ジエタノールアミド3部を水10部に溶解したものを添加し、全体が均一になるまで十分に攪拌して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例 25

カルボキシニルポリマー（ハイビス和光104（和光純薬工業製））1部を水55部に膨潤させた。一方、パルミチン酸イソプロピル10部、セバシン酸ジエチル10部、2,2'-ジヒドロキシ

トキシベンゾフェノン0.5部を添加混合して、消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例 27

(A)：ケトプロフェン1部をハッカ油1部に50～80℃に加熱して溶解した。これにステアリン酸5部、セタノール5部、流動パラフィン15部、白色ワセリン3部、ポリオキシエチレンソルビタンモノステアレート2部、ソルビタンモノステアレート0.6部及びパラオキシ安息香酸プロピル0.05部を加え、これを水浴上で約50～80℃に加熱し、混合した。

一方、(B)：パラオキシ安息香酸メチル0.05部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノール0.5部、トリエタノールアミン10%水溶液3部、ラウリル硫酸ナトリウム0.1部及び精製水63.7部を水浴上で50～80℃に加熱し、溶解した。(B)を(A)溶液に加え、十分に攪拌したあと冷却して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例 2.8

(A) : グリセリンモノステアレート 2.0 部、ポリオキシエチレングリセリルモノオレエート 4 部を混合し、50～70℃にて保ちながらかきまぜ、これにケトプロフェン 5 部、ブチルヒドロキシアニソール 0.02 部及び 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン 1 部を加えよく混合した。

一方、(B) : 精製水 6.083 部にパラオキシ安息香酸メチル 0.15 部を溶解し、グリセリン 7 部を加えた。(B) に (A) の油層を少しずつ加え、全体が均一になるまで十分に攪拌して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例 2.9

ケトプロフェン 1 部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン 0.5 部、イソプロピルミリスチレート 1.0 部に溶解し、更にエタノール 5 部、カルボキシビニルポリマー 1.5 部を精製水 5.0 部に懸濁したもの及びポリオキシエチレン (5.5) モノステアレート 1 部を精製水 1.0 部に溶解した

ものを添加して均一になるまで十分攪拌した。その後、ヤシ油脂肪酸ジエタノールアミド 3 部を精製水 1.0 部に溶解したもの、及び精製水 8 部を加え、全体が均一になるまで十分に攪拌して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例 3.0

(A) : セラチン 5 部、ソルビトール 1.0 部、カオリン 7 部、精製水 4.4 部を混合機内に入れ、約 50～60℃にて溶解し、均一な分散液を得た。これにあらかじめ調製しておいたグリセリン 2.5 部、ポリアクリル酸ソーダ 3 部、カルボキシメチルセルロース 3.5 部の分散液を投入し、攪拌混合し均一な混合物を得た。

(B) : 水浴上にてクロタミトン 1 部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン 0.5 部及びケトプロフェン 1 部を加温混合攪拌し、均一な溶解液を得た。次に (A) に (B) を投入、攪拌し均一な混合物を得た。これを展延機を用いて厚さ 2 mm に塗布、この後ポリプロピレンフィルムに覆

い、所望の大きさに切断して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例 3.1

精製水 4.65 部、セラチン 8 部、ケイ酸アルミニウム 1.0 部、ポリビニルアルコール 3.5 部を混合機内に入れ、約 50～60℃にて溶解し、均一な分散液を得た。これにあらかじめ調製しておいたグリセリン 2.5 部、カルボキシメチルセルロース 3 部の分散液を投入、攪拌混合し、均一な混合物を得た。次にこの混合物にケトプロフェン 3 部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン 1 部を投入、攪拌混合し、均一な混合物を得た。これを展延機を用いて厚さ 1 mm に塗布、この後ポリエチレンフィルムにて覆い、所望の大きさに切断して消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例 3.2

(1) ケトプロフェン	1 部
(2) セラチン	6 部

(3) ポリビニルアルコール	1 部
(4) ポリアクリル酸ナトリウム	3 部
(5) カルボキシビニルポリマー	5 部
(6) 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン	0.5 部
(7) グリセリン	4.5 部
(8) 水	4.0 部
合 計	10.0 部

上記各成分を実施例 3.0 及び 3.1 に記載と同様な方法で混合し、その後支持体上に展延して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例 3.3

(1) ケトプロフェン	2 部
(2) ポリアクリル酸	4 部
(3) 硫酸アルミニウム	1 部
(4) グリセリン	2.4 部
(5) セラチン	4 部

(a) 2'-ジヒドロキシ-4- メトキシベンゾフェノン	1 部
(7) 水	54.5 部
合 計	100 部

上記各成分を実施例30及び31に記載と同様な方法で混合し、その後支持体上に展延して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例34

(1) ポリアクリル酸ナトリウム	1 部
(2) トリエタノールアミン	1 部
(3) ツウイン80	70 部
(4) プロピレングリコール	8 部
(5) ケトプロフェン	5 部
(6) 2'-ヒドロキシ-4- メトキシベンゾフェノン	2 部
(7) 水	13 部
合 計	100 部

(2) ベンジルアルコール	1 部
(3) ポリソルベート80	2 部
(4) 2'-ヒドロキシ-4- メトキシベンゾフェノン	0.5 部
(5) 酸化亜鉛	8 部
(6) ポリエチレングリコール400	3 部
(7) ゼラチン	3 部
(8) ポリアクリル酸ナトリウム	1 部
(9) ソルビット液(70%)	15 部
(10) グリセリン	10 部
(11) カルボキシビニルポリマー	1 部
(12) カルボキシメチルセルロース	1 部
(13) ナトリウム	2 部
(14) 精製水	53 部
合 計	100 部

上記各成分を実施例30及び31に記載と同様な方法で混合し、その後支持体上に展延して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

上記各成分を実施例30及び31に記載と同様な方法で混合し、その後支持体上に展延して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例35

(1) ケトプロフェン	0.5 部
(2) ハッカ油	3 部
(3) 2'-ジヒドロキシ-4- メトキシベンゾフェノン	0.5 部
(4) サリチル酸グリコール	3 部
(5) カオリン	52 部
(6) グリセリン	40 部
合 計	100 部

上記各成分を実施例30及び31に記載と同様な方法で混合し、その後支持体上に展延して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例36

(1) ケトプロフェン	1 部
-------------	-----

実施例37

ポリエチレングリコールモノステアレート2.35部、さらしミツロウ7部に中鎖脂肪酸トリグリセリド8.5、1.5部を加え、約50～70℃に加熱し溶解混合した。これにケトプロフェン5部、2'-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部を加え、更に75～85℃まで加熱し、攪拌しながら完全に溶解させた。溶解後、直ちに40℃前後に急冷し、同温度に保ちながら脱泡した後、ソフトゼラチンカプセル充填機を用いてカプセル充填して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例38

ポリエチレングリコール400 5部、さらしミツロウ8部、ソルビタンセスキオレエート2.85部に中鎖脂肪酸トリグリセリド7.8部を加え、約60～70℃に加熱し、溶解混合した。これにケトプロフェン3部、2'-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、ジブチルヒドロキシトルエン0.01部を加え、更に75～85℃まで加

温し、攪拌しながら完全溶解させた。以下、実施例32に記載と同様な方法で消炎鎮痛坐剤を得た。

実施例39

カンフル4.5部、メントール4部、ケトプロフェン3部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部をエタノール32.5部に溶解し、これに水26部を加えたものをエアゾール容器に充填し、次いでクルク4部を加えた原液を調製し、填充剤としてジメチルエーテル13部と液化石油ガス12部との混合物を圧入したのち、ステム孔径0.4mmφのバルブ孔径0.6mmφペーパーカップ径0.4mmφのバルブを装着し、次いで孔径0.4mmφのメカニカルブレークアップ付のボタンを装着して消炎鎮痛エアゾール剤を得た。

実施例40

カンフル4.5部、ジフェンヒドラミン0.4部、メントール4.5部、ケトプロフェン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部及

びアトコフェロール1部をエタノール1部30.1部に溶解し、これに水24部をかわえたものをエアゾール容器に充填し、次いでジメチルエーテル25部と液化石油ガス9部との混合物を圧入した。以下、実施例34に記載と同様な方法で消炎鎮痛エアゾール剤を得た。

実施例41

ケトプロフェン	0.1 部
2-ヒドロキシ-4-	
メトキシベンゾフェノン	0.05 部
白色ワセリン	10 部
流動パラフィン	89.85 部
全量	100 部

上記各成分を均一になるまで攪拌して、消炎鎮痛点眼剤を得た。

実施例42

ケトプロフェン	0.5 部
---------	-------

ホウ酸	1.6 部
ホウ砂	適量
2-ヒドロキシ-4-	
メトキシベンゾフェノン	0.1 部
水	残量
全量	100 部

上記各成分を均一になるまで攪拌し、pH7.4の消炎鎮痛点眼剤を得た。

実施例43

ケトプロフェンナトリウム	0.5 部
2-ヒドロキシ-4-	
メトキシベンゾフェノン	
アルギニン	0.1 部
1N塩酸	0.32 部
水	適量
全量	100 部

上記各成分を均一になるまで攪拌して、pH7.4

の消炎鎮痛点眼剤を得た。

実施例44

スチレン-イソブレン-スチレンテブレック共重合体(カリフレックスTR1107、シェル化学社製)12部、スチレン-イソブレン-スチレンラジアルテブレック共重合体(ソルブレンμ18、フィリップス・ベトリウム社製)8部、水添ロジエンエステル(エステルガスH、荒川化学製)12部、ロジエン変性マレイン酸樹脂(マルキ-ド2号-N、荒川化学製)3部、流動パラフィン(クリストール355、エッソスタンダード石油製)57.5部を密着ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150℃)を約120℃まで冷却した後、ケトプロフェン5部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン2.5部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて不織布上に厚さ約50μに展延した後、離型処理を施した制離紙で望みの大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例 4 5

スチレン-イソブレン-スチレンテラブロック共重合体(カリフレックスTR1107, シェル化学社製) 2.2.5部、流動パラフィン(和光純薬製) 4.3:5部、水添ロジンエステル(エステルガムH, 荒川化学製) 2.8部を窒素ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150℃)を約120℃まで冷却した後、ケトプロフェン5部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて非起毛の布の支持体上に厚さ約50μに展延した後、ポリエチレンフィルムで覆い所望の大きさに切断し消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例 4 6

スチレン-イソブレン-スチレンテラブロック共重合体(カリフレックスTR1107, シェル化学社製) 2.0部、流動パラフィン(クリストール355, エッソスタンダード社製) 4.0部、水添ロジンエステル(エステルガムH, 荒川化学製)

1.2部、ロジン変性マレイン酸樹脂(マルキード2号-N, 荒川化学製) 1.8部を窒素ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150℃)を約120℃に冷却した後、ケトプロフェン5部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部及びケトプロフェン4部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いてスフ上に厚さ約90μに展延した後、離型処理を施したポリプロピレンフィルムで覆い所望の大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例 4 7

スチレン-イソブレン-スチレンテラブロック共重合体(カリフレックスTR1107, シェル化学社製) 2.2部、流動パラフィン(クリストール355, エッソスタンダード社製) 4.2部、水添ロジンエステル(エステルガムH, 荒川化学製) 2.7.5部を窒素ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150℃)を約120℃に冷却した後、ケトプロフェン5部、2-ヒドロキシ-4-メト

キシベンゾフェノン1.5部及びケトプロフェン2部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて離型紙上に厚さ50μに展延、冷却後、厚さ60μのポリエチレンフィルム上に転写し、所望の大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例 4 8

スチレン-イソブレン-スチレンラジアルテラブロック共重合体(ソルブレン418, フィリップス-ベトリウム社製) 2.8:5部、流動パラフィン(クリストール355, エッソスタンダード石油社製) 3.8:5部、水添ロジンエステル(エステルガムH, 荒川化学製) 2.3部、ロジン変性マレイン酸樹脂(マルキード2号-N, 荒川化学製) 6部を窒素ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150℃)を約120℃に冷却した後、ケトプロフェン4部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて不織布上に厚さ約50

μに展延した後、ポリプロピレンフィルムで覆い所望の大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例 4 9

スチレン-イソブレン-スチレンラジアルテラブロック共重合体(ソルブレン418, フィリップス-ベトリウム社製) 2.5部、スチレン-ブタジエン-スチレンラジアルテラブロック共重合体(ソルブレン413, 旭化成社製) 2部、流動パラフィン(クリストール70, エッソスタンダード石油社製) 5.1.5部、水添ロジンエステル(エステルガムH, 荒川化学製) 1.8.5部、ロジン変性マレイン酸樹脂(マルキード2号-N, 荒川化学製) 1.1部を窒素ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150℃)を約120℃に冷却した後、ケトプロフェン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン5部、スルホン酸1部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて起毛布上に厚さ約90μに展延した後、ポリエチレンフィルムで覆い所望の大きさに切断

して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例5-0

スチレン-イソブレン-スチレンラジアルテ
ブロック共重合体(ソルブレン418、フィリッ
プス・ベトロリアム社製)16部、スチレン-
タジエン-スチレンラジアルテブロック共重
合体(ソルブレン414、日本エラストマー社
製)1.5部、流動パラフィン(クリストール70、
エッソスタンダード石油社製)51.5部、ロジ
ン変性マレイン酸樹脂(マルキード2号-N、荒川
化学製)26.5部を真空ガス気流中で溶解し、こ
の溶解物(約150℃)を約120℃に冷却した
後、ケトプロフェン3部、2-ヒドロキシ-4-
メトキシベンゾフェノン1.5部、 β -メントール
16.5部、 α -カンフル5部を添加、混合して均
一なものとした。これを展延機を用いて起毛布の
上に厚さ約1mmに展延した後、表面をポリエ
チレンフィルムで覆い所望の大きさに切断して消炎鎮
痛貼付薬を得た。

実施例51

スチレン-イソブレン-スチレンラジアルテ
ブロック共重合体(ソルブレン418、フィリッ
プス・ベトロリアム社製)21部、流動パラフィ
ン(和光化学製)50部、ロジン変性マレイン酸
樹脂(マルキード2号-N、荒川化学製)20部、
水添ロジンエステル(エステルガムH、荒川化学
製)2部を真空ガス気流中で溶解し、この溶解物
(約150℃)を約120℃に冷却した後、ケト
プロフェン4部、2-ヒドロキシ-4-メトキシ
ベンゾフェノン3部、トウガラシエキスを4.5部を
添加、混合して均一なものとした。これを展延機
を用いて起毛布の上に厚さ約1mmに展延した後、
表面をポリエチレンフィルムで覆い所望の大き
さに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例52

スチレン-イソブレン-スチレンラジアルテ
ブロック共重合体(カリフレックスTR-1107、シ
ェル化学社製)35部、流動パラフィン(クリス
トール70、エッソスタンダード石油社製)35部、
水添ロジンエステル(エステルガムH、荒川化学
製)16.5部を真空ガス気流中で溶解し、この溶
解物(約150℃)を約120℃に冷却した後、
ハッカ油3部、ケトプロフェン2部、2-ヒドロ
キシ-4-メトキシベンゾフェノン1部、 β -
メントール3部、 α -カンフル1部、 β -メントール
0.5部を添加、混合して均一なものとした。こ
れを展延機を用いて25 μ mポリエチレン
フィルム上に塗布した。その後離型処理した
剝離紙で覆い所望の大きさに切って消炎鎮
痛貼付薬を得た。

手続補正書(自発)

昭和60年1月10日

特許庁長官 志賀 学 殿

1. 事件の表示
昭和58年 特許願第197383号

2. 発明の名称
安定なケトプロフェン含有外用製剤

3. 補正をする者
事件との関係 特許出願人

住所 佐賀県鳥栖市田代大町408番地(☎841)
ヒサミツセイヤク 株式会社
名称 久光製薬株式会社
代表者 中富博隆
(連絡先 会 09428-3-2101 山川秀樹)



特許出願人 久光製薬株式会社
代表者 中富博隆



- 補正命令の日付 自発
- 補正の対象
明細書の発明の詳細な説明の欄
- 補正の内容
別紙の通り



明細書

1. 発明の名称

安定なケトプロフェン含有外用製剤

2. 特許請求の範囲

1. ケトプロフェンを含有する外用製剤に紫外線吸収剤を配合することを特徴とする安定なケトプロフェン含有外用製剤。
2. ケトプロフェンを含有する外用製剤に紫外線吸収剤と抗酸化剤の両者を配合することを特徴とする安定なケトプロフェン含有外用製剤。
3. 紫外線吸収剤がp-アミノ安息香酸誘導体、アントラニル酸誘導体、チリチル酸誘導体、桂皮酸誘導体、ベンゾフェノン誘導体、クマリン誘導体、アミノ酸系化合物からなる特許請求の範囲第1項記載又は第2項記載のケトプロフェン含有外用製剤。
4. 紫外線吸収剤がベンゾフェノン誘導体である特許請求の範囲第1項記載又は第2項記載のケトプロフェン含有外用製剤。

5. ベンゾフェノン誘導体が2,2'-ジヒドロキシ-4,4'-ジメトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-n-オクトキシベンゾフェノン、2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸、4-フェニルベンゾフェノン-2-カルボン酸、イソオクチルエステル、2-ヒドロキシベンゾフェノン、2,4-ジヒドロキシベンゾフェノン、2,2'-4,4'-テトラヒドロキシベンゾフェノンからなる特許請求の範囲第3項又は第4項記載のケトプロフェン含有外用製剤。

3. 発明の詳細な説明

本発明は安定なケトプロフェン含有外用製剤に係り、特にケトプロフェンを含有する外用製剤に紫外線吸収剤を配合することを特徴とする安定な外用製剤に関するものである。

更にはこれに加えて必要に応じて抗酸化剤を配合することを特徴とする安定な外用製剤に関するも

のである。

ケトプロフェンは優れた抗炎症作用および鎮痛作用を有する非ステロイド性消炎鎮痛剤であり、経口剤、坐剤および注射剤等の製剤形態において慢性関節リウマチ、変形性関節症、外傷ならびに手術後の鎮痛消炎及びその他の各外科領域の安定性疾患等の治療に汎用されている薬物である。

しかし、前記した製剤形態においては、胃腸、肝、腎臓等への副作用の発現があり、経口的使用には問題を残している。そこで、軟膏剤、ゲル剤、クリーム剤、湿布剤、貼付剤等の外用製剤の開発研究が検討されているが、製剤自体の安定性及び薬効成分であるケトプロフェンに対する安定性の検討はまだ十分なものではなく、満足しうる安定な外用製剤の完成には至っていないのが現状である。

即ち、ケトプロフェンにおいてはその錠剤を日光下に放置しても経時変化は少なく安定であるのに対し、外用の製剤形態では経時変化が激しく非常に不安定であることが明らかである。尚、その

原因を本願発明者が検討したところ、ケトプロフェン自体が光に非常に不安定であり、錠剤の形態においては緩衝にもコーティングされ、光の影響を受けにくい、これに対して外用製剤は直接的、又は間接的に光の影響を受けやすいものであると考察された。

又、ケトプロフェンはこの光の影響により、3-エチルベンゾフェノン及び3-フェチルベンゾフェノンの二つの副生成物を生じることとも明らかとなった。

然で、この前記二つの副生成物は製剤の安定性、使用感及び着色に対する影響が多量であり、又、皮膚アレルギーの原因の一つに挙げられるものである。そこで本願発明者はケトプロフェン含有外用製剤における上記の欠点を解消すべく鋭意研究を重ね本願発明の安定な外用製剤を完成するに至ったものである。即ち本願発明の目的は安定なケトプロフェン含有外用製剤を提供することにある。

本願発明はベンゾフェノン誘導体に代表される

紫外線吸収剤並びに必要に応じ、抗酸化剤をケトプロフェン含有外用製剤に配合することにより、ケトプロフェンの充分分解が特異的且つ顕著に抑制されるという新規知見に基づき完成されたものである。

因、本願発明はケトプロフェンを含有する外用製剤（例えば軟膏剤、ゲル剤、クリーム剤、湿布剤、貼付剤、坐剤、リニメント剤、点眼剤、エアゾール剤等を含む）に紫外線吸収剤、例えば

-アミノ安息香酸誘導体、アントラニル酸誘導体、サリチル酸誘導体、桂皮酸誘導体、ベンゾフェノン誘導体、クマリン誘導体、アミノ酸系化合物及びその他の紫外線吸収剤等々を配合することを特徴とするものである。

更に詳細には、

-アミノ安息香酸誘導体としては、

-アミノ安息香酸、

-アミノ安息香酸のエチル、プロピル、ブチル、イソブチル、モノグリセリン等の各種エステル、

-ジメチル

-アミノ安息香酸及びエチル又はアミル等のエステル、

-ジエチル

-アミノ安息香酸及びエチル又はアミ

ル等のエステル、

-ジメチル

-アミノ安息香酸 2-エチルヘキシルエステル、等を、又アントラニル酸誘導体としては、アントラニル酸のエステル誘導体、その中でも特にアントラニル酸メンチルエステル等が挙げられる。サリチル酸誘導体としては、エステル誘導体が好ましく、その中でもサリチル酸のメンチル、ホモメンチル、エチレンジグリコール、グリセリン、2-エチルヘキシル、トリブチル、ボルニル、フェニル等の各エステル体及びサリチル酸のトリエタノールアンモニウム塩等を、桂皮酸誘導体としては、シノキサート、

-メトキシ桂皮酸ジエタノールアミン、

-メトキシ桂皮酸 2-エチルヘキシルエステル、

-アセトアミド桂皮酸イソプロピルエステル等を、ベンゾフェノン誘導体としては、2,2'-ジヒドロキシ-4,4'-ジメトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4'-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4'-オクタキシベンゾフェノン、2,2'-ジヒドロキシ-4'-メトキシベンゾフェノン、2-ヒドロキシ-4'-メトキシベンゾフェノン-

5-スルホン酸、4-フェニルベンゾフェノン-2-カルボン酸-イソオクタールエステル、2-ヒドロキシベンゾフェノン、2,4-ジヒドロキシベンゾフェノン、2,2'-4,4'-テトラヒドロキシベンゾフェノン等が挙げられる。クマリン誘導体としては、7-エチル

-4-メチルクマリン、7,8-ジヒドロキシクマリン、6,7-ジヒドロキシクマリン、7-ヒドロキシクマリン、4-メチル-7-ヒドロキシクマリン等を、アミノ酸系化合物としては、ウロカニン酸、トリプタミン誘導体、グルタミン酸誘導体等を、又その他の紫外線吸収剤としては、ベンゾトリアゾール誘導体、イミダゾリン誘導体、ピリジン誘導体、テトラゾール誘導体、ジオキサン誘導体、フラン誘導体、ピロン誘導体、カンファー誘導体、核酸誘導体、アラントイン誘導体、ニコチン酸誘導体、シコニンあるいはビタミンB₆誘導体等々が挙げられる。

尚、配合される紫外線吸収剤としてはベンゾフェノン誘導体が特に好ましい。

更に、本願発明はケトプロフェンを含有する外

用製剤に前記した紫外線吸収剤に加えて、必要に応じて抗酸化剤を配合することでもできるものである。

尚、抗酸化剤としては、例えばアスコルビン酸ステアリン酸エステル、 α -アスコルビン酸ナトリウム、トコフェロール（例えば α -トコフェロール、 β -トコフェロール、 γ -トコフェロール、 δ -トコフェロール等のd体、e体、d,e体）およびこれらのエステル誘導体、ノルジヒドログアケルチン酸、ジブチルヒドロキソトルエン、ブチルヒドロキシアニソール、tert-ブチルヒドロキソ没食子酸エステル（エチル、プロピル、イソアミル等のエステル）、1-オキシ-3-メチル-4-イソプロピルベンゼン等が挙げられる。前記抗酸化剤は紫外線吸収剤と併用して配合することにより、ケトプロフェンの充分分解は一層抑制され、非常に安定な外用製剤が得られるものである。

次に、配合量について述べる。紫外線吸収剤は各外用製剤の全重量100重量%に対して0.01～5重量%、好ましくは0.1～1重量%配合され

る。又、抗酸化剤は各外用製剤の全重量100重量%に対して0.01~5重量%、好ましくは0.05~1重量%配合される。

以上詳述した如く、本願発明はケトプロフェンを有効成分として含有する外用製剤、例えば軟膏剤、ゲル剤、クリーム剤、湿布剤、貼付剤、坐剤、リネメント剤、点眼剤、エアゾール剤等に前記した紫外線吸収剤、及び必要に応じ抗酸化剤を配合することを特徴とするもので、これにより前記した本願発明の目的を達することができるものである。

尚、ここで前述の外用製剤の各々について、本願発明の態方例を示す。

まず、軟膏剤について説明する。軟膏基剤は公知あるいは通常使用されているものの中より選択されるが、例えば、高級脂肪酸又はそれらのエステル類(例：アジピン酸、ミリスチン酸、パルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸、アジピン酸エステル、ミリスチン酸エステル、パルミチン酸エステル、セバシン酸ジエチル、ラウリン酸ヘキ

シル、イソオクタン酸セチル等)、ロウ類(例：蜂ロウ、ミツロウ、セレンシ等)、界面活性剤(例：ポリオキシエチレンアルキルエーテルリン酸エステル等)、高級アルコール(例：セタノール、ステアリアルアルコール、セトステアリアルアルコール等)、シリコン油(例：ジメチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、グリコールメチルポリシロキサン、シリコーングリコールポリマー等)、炭化水素類(例：親水ワセリン、白色ワセリン、精製ラノリン、炭酸パラフィン等)、水、吸収促進剤(例：炭酸プロピレン、ジイソプロピルアジベート、クロタミトン、エイゾン[®]等)、保湿剤(例：グリセリン、プロピレングリコール、ブチレングリコール、ソルビトール等)、かぶれ防止剤、その他の添加物(例：サリチル酸、サリチル酸メチル、サリチル酸グリコール、エーメントール、カンフル、ハッカ油等)から選択されることが好ましい。

以上の各基剤に薬効成分であるケトプロフェンを配合し、更に本願発明の特徴である紫外線吸収

剤、又は必要に応じ抗酸化剤を適宜配合することにより、本願発明の軟膏剤を得ることができるものである。

次に、軟膏剤の製造例の一つを述べ参考に供する。

高級脂肪酸エステル5~15重量%、界面活性剤1~10重量%にケトプロフェン0.1~10重量%、紫外線吸収剤0.01~5重量%を室温又は加温下に併じ抗酸化剤0.01~5重量%を加え加温又は加温下に混合し、ロウ類4~10重量%、炭化水素50~90重量%を加え加温又は加熱融解し、50~100℃に保つ。全成分が透明溶液となった後ホモミキサーで均一に混和する。その後、攪拌しながら室温下下げることで本願発明の軟膏剤が得られる。尚、上記の製造例は一例にすぎず公知又はこれに類似の方法及び処方により製造しうることは言うまでもない。又、各配合物の配合順序等も特に限定されるものでない。(以下、各種製剤の態方例、製造例にこれは共通するものである)

次に、ゲル剤について述べる。ゲル基剤は公知あるいは通常使用される各種基剤から選択されるが、例えば、低級アルコール(例：エタノール、イソプロピルアルコール等)、水、ゲル化剤(例：カルボキシビニル重合体、ヒドロキシエチルセルロース、ヒドロキシプロピルセルロース、メチルセルロース、エチルセルロース、カルボキシメチルセルロース、アルギン酸プロピレングリコールエステル等)、中和剤(例：トリエタノールアミン、ジイソプロパノールアミン、水酸化ナトリウム等)、界面活性剤(例：セスキオレインソルビタン、トリオレイン酸ソルビタン、モノオレイン酸ソルビタン、モノステアリン酸ソルビタン、モノラウリン酸ソルビタン、モノステアリン酸ポリエチレングリコール、ポリオキシエチレンニルフェニルエーテル、ポリオキシエチレンセチルエーテル、ポリオキシエチレンラウリルエーテル等)、吸収促進剤(例：炭酸プロピレン、ジエチルセバケート、ジイソプロピルアジベート、クロタミトン、エイゾン[®]、プロピレングリコール等

）、かぶれ防止剤、その他の添加物（例：サリチル酸、サリチル酸メチル、サリチル酸グリコール、 ϵ -メントール、カンフル、ハッカ油等）が挙げられる。以上の各基剤に薬効成分であるケトプロフェンを加え、そして紫外線吸収剤、又は必要に応じ抗酸化剤を適宜配合することにより本願発明のゲル剤を得ることができる。

ここでゲル剤の製造例の一つを示す。

(A) 水 5 重量%以下にゲル化剤 0.5～5 重量%を加えて膨潤させ、一方、(B) ケトプロフェン 0.1～1.0 重量%及び紫外線吸収剤 0.01～5 重量%、又は必要に応じ抗酸化剤 0.01～5 重量%を溶剤に溶解、もしくは懸濁し、更にこれをグリコール類 4.0 重量%以下と低級アルコール 6.0 重量%以下の混合物に溶解し、次いで (B) を (A) に加えて中和剤を添加し、pH が 4～7 になるよう調整することにより本願発明のゲル剤が得られる。

次に、クリーム剤について述べる。クリーム基剤は公知あるいは通常使用される各種基剤から選

択されるが、例えば高級脂肪酸エステル類（例：ミリスチン酸エステル、パルミチン酸エステル、セバシン酸ジエチル、ラウリン酸ヘキシル、イソオクタン酸セチル等）、低級アルコール（例：エタノール、イソプロパノール等）、炭水化合物（例：流動パラフィン、スクワラン等）、多価アルコール（例：プロピレングリコール、1,3-ブチレングリコール等）、高級アルコール（例：2-ヘキシルデカノール、セタノール、2-オクタリドデカノール等）、乳化剤（例：ポリオキシエチレンアルキルエーテル類、脂肪酸エステル類、ポリエチレングリコール脂肪酸エステル等）、防腐剤（例：パラオキシ安息香酸エステル）、吸収促進剤（例：炭酸プロピレン、ジエチルセバケート、ジソプロピルアジベート、クロクミトン、エイゾン[®]等）、かぶれ防止剤、その他の添加物（例：サリチル酸、サリチル酸メチル、サリチル酸グリコール、 ϵ -メントール、カンフル、ハッカ油等）が挙げられる。以上の各基剤に薬効成分であるケトプロフェンを加え、更に紫外線吸収剤、又

は必要に応じ抗酸化剤を適宜配合することにより本願発明のクリーム剤を得ることができる。又、クリーム剤とゲル剤の中間の性質を有するゲル状クリーム剤とする場合には、上記のクリーム剤にゲル化剤（例：カルボキシビニル重合体、ヒドロキシエチルセルローズ、ヒドロキシプロピルセルローズ、エチルセルローズ、カルボキシメチルセルローズ等）、及び中和剤（例：ジソプロピルアミン、トリエタノールアミン、水酸化ナトリウム等）を加え、pH 値 4～8、好ましくは 5～6.5 に調整することにより本願発明のゲル状クリーム剤を得ることができる。

以下、ゲル状クリーム剤の製造例の一つを示す。

(A) ケトプロフェン 0.1～1.0 重量%、紫外線吸収剤 0.01～5 重量%、又は必要に応じ抗酸化剤 0.01～5 重量%を高級脂肪酸エステル 2.5 重量%以下と低級アルコール 4.0 重量%以下の混合物に溶解し、更に防腐剤 0.5 重量%以下、乳化剤 5 重量%以下を加える。一方、(B) 水にゲル化剤 0.5～5 重量%を加えて膨潤させ、次いで (B)

を (A) に加えてホモミキサーで均一に乳化させ、乳化後中和剤を添加し、pH 値を 4～8 に調整すると本願発明のゲル状クリーム剤が得られる。

次に、湿布剤について述べる。湿布基剤、例えば増粘剤（例：ポリアクリル酸ソーダ、ポリアクリル酸、ポバール、ポリビニルピロリドン、ポリエチレンオキサイド、ポリビニルメタアクリレート等の合成水溶性高分子、アラビアゴム、デンプン、ゼラチン等の天然物、メチルセルローズ、ヒドロキシプロピルセルローズ、アルギン酸、アルギン酸ナトリウム、アルギン酸アモンニウム、カルボキシメチルセルローズナトリウム等）、湿潤剤（例：尿素、グリセリン、プロピレングリコール、ブチレングリコール、ソルビトール等）、充填剤（例：カオリン、酸化亜鉛、タルク、チタン、ベンナイト、エポキシ樹脂類、有機酸（クエン酸、酒石酸、マレイン酸、無水マレイン酸、コハク酸等）、カルシウム、マグネシウム、アルミニウム等）、水、溶解補助剤（例：炭酸プロピレン、クロクミトン、ジソプロピルアジベート等）、粘

着付与剤(例:ロジン、エステルガム、ポリブテン、ポリアクリル酸エステル等)、かぶれ防止剤(例:塩酸ジフェニヒドラン、マレイン酸クロルフェニルアミン、グリチルリチン酸、デキサメタゾン、ベタメタゾン、フルオキノロンアセトニド等)、その他の添加物(例:サリチル酸、サリチル酸メチル、サリチル酸グリコール、エーメントール、カンフル、ノニル酸ワニルアミド、チモール、トウガラシエキス、ワニル酸、エイゾン[®]等)等から選択された各基剤に薬効成分であるケトプロフェンを加え、更に紫外線吸収剤、又は必要に応じて抗酸化剤を適宜配合することにより本願発明の湿布剤を得ることができる。

次に、湿布剤の製造例の一つを示す。

(A) ケトプロフェン0.1~1.0重量%、紫外線吸収剤0.01~5重量%、又は必要に応じて抗酸化剤0.05~5重量%を溶解補助剤0.5~8重量%と混合溶解し均一なものとする。次に(B)増粘剤5~20重量%、好ましくは10~15重量%を溶剤5~40重量%、水10~80重量%に

混合分散溶解し、充量剤2.0重量%以下を加え均一な練合物とする。次いで(A)を(B)に加え混合し、均一な練合物を得る。この練合物を通常の方法で支持体上に展延塗布した後、その上に制膜被覆物を貼付することにより本願発明の湿布剤が得られる。尚、支持体には伸縮性又は非伸縮性の布地、不織布、不織紙等から、制膜被覆物はポリエチレン、ポリプロピレン、ポリ塩化ビニール、ポリエステル、ポエ塩化ビニリデン、シリコン加工紙等から適宜選択される。

次に、貼付剤について述べる。貼付剤用基剤は公知の高分子基剤(例:メタアクリル酸エステル類、アクリルニトリル、酢酸ビニル、プロピオン酸ビニル等のビニルモノマーとの共重合体であるアクリル系組成物、シリコン樹脂、ポリイソブレンゴム、ポリイソブチレンゴム、天然ゴム、アクリルゴム、スチレン-ブタジエン-スチレンブロック共重合体、スチレン-イソブレン-スチレンブロック共重合体等)、油脂又は高級脂肪酸(例:アーモンド油、オリーブ油、ツバキ油、パー

シツク油、ラッカセイ油、オレイン酸、流動パラフィン、ポリブテン等)、粘着付与剤(例:ロジン、ロジン変性マレイン酸、水添ロジンエステル等)、かぶれ防止剤から選択された基剤にその他の添加物(例:サリチル酸、サリチル酸メチル、サリチル酸グリコール、[®]カンフル、エーメントール、チモール、ノニル酸ワニルアミド、トウガラシチンキ、ハッカ油、ペパーミントオイル、エイゾン[®]等)を必要に応じて加え、次に薬効成分であるケトプロフェンを配合し、更に紫外線吸収剤、又は必要に応じて抗酸化剤を適宜配合し、これを伸縮性又は非伸縮性の支持体(例:ポリプロピレン、ポリエステル、ポリ塩化ビニリデン、ポリアクリル、ポリウレタン、レーヨン、木綿、エチレン-酢酸ビニル共重合体、布、不織布、不織紙等)に展延塗布した後、その上に制膜被覆物を貼付することにより本願発明の貼付剤を得ることができる。尚、貼付剤の製造は通常公知の方法に準じて簡単に行なえるものであり、又、配合組成は公知の冷感又は温感貼付剤における薬効成分

をケトプロフェン0.1~1.0重量%に置換し更に紫外線吸収剤0.01~5重量%又は必要に応じて抗酸化剤0.01~5重量%を配合することにより本願発明の貼付剤を得ることができる。

次に、坐薬について述べる。坐薬用基剤としては、従来公知の坐薬基剤、つまり、親油性基剤、水溶性基剤、乳剤性基剤の中より適宜選択使用される。

又、必要に応じて配合される添加剤として、局所麻酔薬、殺菌剤、抗ヒスタミン剤、局所収れん剤、サルブタモール、抗生物質、座傷治療薬、界面活性剤、ビタミン類、生薬エキス、胆汁酸類、防腐剤、成形剤、吸収促進剤、[®]酸等が用いられる。

尚、坐薬用基剤は例えば、カカオ脂、水素添加ラッカセイ油、水素添加マージン油等の合成油脂性基剤、ポリエチレングリコール類、モノレン、ツクイン、アルロニク等の水溶性基剤から選択され、当該基剤に薬効成分であるケトプロフェン0.1~1.0重量%、紫外線吸収剤0.01~5重量%、更

に必要に応じ抗酸化剤0.01～5重量%配合することにより、本願発明のケトプロフェン含有坐剤製剤を得ることができる。

次に、リニメント剤について述べる。本願発明のリニメント剤はアルコール類(例：エタノール、プロパノール、イソプロパノール等の1価のアルコール、ポリエチレングリコール、プロピレングリコール、テトラヒドログリコール等の多価アルコール等)10～70重量%、水55重量%以下、脂肪酸エステル(例：アジピン酸、セバチン酸、ミリスチン酸の各種エステル等)60重量%以下、界面活性剤(例：ポリオキシエチレンアルキルエーテル)10重量%以下、に有効成分であるケトプロフェン0.1～10重量%を加え、更に紫外線吸収剤0.01～5重量%、必要に応じ抗酸化剤0.01～5重量%配合することにより本願発明のリニメント剤を得ることができる。

尚、上記処方例及び製造例は単なる一例であり、当然公知のリニメントの製造法で本願発明のリニメント剤を得ることができるものである。又、配

合組成においても公知のリニメント剤の薬効成分をケトプロフェンに置換し、それに紫外線吸収剤を配合することにより、簡単に本願発明のリニメント剤を得ることができる。尚、本願発明のリニメント剤において必要に応じpH調整の為の中和剤あるいはメチルセルロース、カルボキシビニルポリマー、ヒドロキシプロピルセルロース等の粘性付与剤、かぶれ防止剤、又はその他の添加物(例：サリチル酸、サリチル酸メチル、サリチル酸グリコール、ローメントール、カンフル、ハッカ油、トウガラシエキスを、ノニル酸ワニリルアミド、チモール、クロタミトン、エイゾン[®]、炭酸プロピレン、ジソプロピルアジベート等)を配合することもできる。

又、点眼剤及びエアゾール剤等においても、紫外線吸収剤0.01～5重量%、又は必要に応じ抗酸化剤0.01～5重量%を、配合することにより本願発明の点眼剤、エアゾール剤を得ることができる。

尚、これらの製造方法は従来公知の方法で十分

であり、又配合組成は公知の製剤における薬効成分をケトプロフェンに置換し、それに紫外線吸収剤、又は必要に応じ抗酸化剤を配合することにより本願発明の前記製剤を得ることができる。

以上詳述した如く、本願発明はケトプロフェン含有の外用製剤に、紫外線吸収剤及び必要に応じ抗酸化剤を配合することを特徴とするものであるが、本願発明によると有効成分であるケトプロフェンの光分解を防止できるので下記のような効果を有するものである。

1. 光の影響によって発生する分解物が著しく抑制される。
2. 着色防止効果が顕著である。
3. かゆみ、かぶれ及びその他の皮膚アレルギー等の副作用が著しく緩和される。
4. 皮膚吸収による皮膚毒性が低くなる。
5. 光照射における皮膚損傷等の副作用が著しく緩和される。
6. 長期間保存しても製剤が安定に保たれ、変質することがなく、且つ使用感等が最初の

状態で常に保たれる。

因、ここで本願発明に関連する従来技術について説明すると、ケトプロフェンを含有する外用製剤において紫外線吸収剤又は必要に応じ抗酸化剤を配合した例、又はそれを示唆した例は世界になく、安定化という目的のためにこれを配合したのは本願発明者が最初になし得たことである。

以下、前述した本願発明の効果をさらに説明するため試験例を、又本願発明を更に具体的に説明するため実施例を示す。

試験例1

2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノンの配合量が0%、0.1%、0.2%、0.5%、1.0重量%のゲル剤を実施例1に記載された方法で得た。これらのゲル剤をガラス板に薄く塗布したのち、直射日光が十分に照射しうる場所へ放置し、8時間後のケトプロフェンの残存量を液体クロマトグラフィーによって測定した。その結果を表1に示す。

表 1

ゲル剤の種類	ケトプロフェンの 残存率(%)
0.1% 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合のゲル剤	2.3
0.1% 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合のゲル剤	2.9
0.2% 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合のゲル剤	4.4
0.5% 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合のゲル剤	7.4
1.0% 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合のゲル剤	9.0

試験例 2

後述する実施例 1 のゲル剤と、実施例 1 に記載の方法と同様の方法で製造した 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノンを配合していないゲル剤を、各々透明のガラス容器に入れ日光にあて、1 日、3 日、5 日、7 日間後の着色の度合いを観察

した。その結果を表 2 に示す。

表 2

試料 期間	実施例 1 のゲル剤	2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノンを配合していないゲル剤
1 日	変化なし	微黄色
3 日	変化なし	黄色
5 日	変化なし	黄色
7 日	微黄色	黄褐色

試験例 3

実施例 16 に記載の方法と同様の方法で、シノキサート、2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、アントラニル酸メチル、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン、p-ジメチルアミノ安息香酸 2-エチルヘキシル、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸、サリチル酸フェニルの各種紫外線吸収剤を 1.0 重量% 配合した各種軟膏剤、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン及び p-トコ

フェノール各 1.0 重量% 配合した軟膏剤、紫外線吸収剤又は抗酸化剤を配合しない軟膏剤を得た。これらを室温にて室内（直射日光を受けにくい場所）に 1 週間放置しその後ケトプロフェンの残存量を液体クロマトグラフィーによって測定した。その結果を表 3 に示す。

表 3

ゲル剤の種類	ケトプロフェンの 残存率(%)
シノキサート配合の軟膏剤	7.3
2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合の軟膏剤	8.3
アントラニル酸メチル配合の軟膏剤	6.3
2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン配合の軟膏剤	8.7
p-ジメチルアミノ安息香酸 2-エチルヘキシル配合の軟膏剤	6.4
2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸配合の軟膏剤	8.0

ゲル剤の種類	ケトプロフェンの 残存率(%)
サリチル酸フェニル配合の軟膏剤	6.5
2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン及び p-トコフェノール配合の軟膏剤	9.5
紫外線吸収剤及び抗酸化剤を全く配合していない軟膏剤	5.1

試験例 4

2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノンの配合量が 0.1%、0.2%、0.5%、1.0% 重量% の各種製剤を実施例 1 に示した方法で得た。これらの製剤をガラス板に塗布又は貼付し、直射日光が十分に照射しうる場所へ放置し、8 時間後のケトプロフェンの残存率(%) を液体クロマトグラフィーによって測定した。その結果を表 4 に示す。

表 4

実施例	2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノンの配合量(%)				
	0.0	0.1	0.2	0.5	1.0
実施例29の製剤 (ゲルクリーム)	3.5	3.9	5.0	7.5	8.8
実施例13の製剤 (リニメント)	2.4	2.7	3.9	6.5	7.7
実施例30の製剤 (湿布剤)	8.0	8.2	8.5	9.4	9.5
実施例40の製剤 (エアゾール)	3.0	3.4	5.1	7.0	8.3
実施例52の製剤 (貼付剤)	6.9	7.4	8.0	8.8	9.1

実施例 1

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光104：和光純薬工業特製）2部を精製水2.5部に膨潤させた。これに、エチルアルコール4.0部及びジソプロピルアジベート2部にケトプロフェン

実施例 3

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光104：和光純薬工業特製）2.5部を精製水2.1部に膨潤させた。これにエチルアルコール4.0部及びジソプロピルアジベート3部にケトプロフェン5部及び2,4-ジヒドロキシベンゾフェノン（一般名：ベンズレソルシノール）1.0部を溶解した溶液を加え攪拌した。更にヒドロキシプロピルセルロース1部を1,3-ブチレングリコール1.5部に溶解したものを加えて攪拌した後、ジソプロパノールアミン3部を精製水8.5部に溶解したものを加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例 4

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光104：和光純薬工業特製）2部を精製水2.1部に膨潤させた。これにエチルアルコール4.3部及びジソプロピルアジベート3部にケトプロフェン2部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェ

ノン0.5部を溶解した溶液を加え攪拌した。更に、これにヒドロキシプロピルセルロース2部をプロピレングリコール1.5部に溶解したものを加え攪拌した後、ジソプロパノールアミン2.5部を精製水8部に溶解したものを加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤をえた。

実施例 2

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光104：和光純薬工業特製）1.5部を精製水2.5.1部に膨潤させた。これにエチルアルコール2.0部及び炭酸プロピレン1.0部にケトプロフェン1部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.2部を溶解した溶液を加え攪拌した。さらにヒドロキシプロピルセルロース2部をプロピレングリコール3.0部に溶解したものを加えて攪拌した後、トリエタノールアミン0.2部を精製水1.0部に溶解したものを加え全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

ノン0.5部、更にナードコフェロール1.0部を溶解した溶液を加え攪拌した。更にヒドロキシプロピルセルロース2部をプロピレングリコール1.6部に溶解したものを加え攪拌後、ジソプロパノールアミン2.5部を精製水7部に溶解したものを加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例 5

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光104：和光純薬工業特製）2.5部を精製水1.8部に膨潤させた。これにエタノール4.3部及びクロタミトン3部にケトプロフェン3部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部を溶解した溶液を加え攪拌した。更にヒドロキシプロピルセルロース1部を1,3-ブチレングリコール1.5部に溶解したものを加えて攪拌した後、ジソプロパノールアミン3部を精製水1.0.8部に溶解したものを加え、更にブチルヒドロキシアニソール0.2部を加え全体が均一になるまで十分攪拌

して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例 6

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光 104；和光純薬工業特製）1部を精製水2.5部に膨潤させた。これにエタノール4.0部、プロピレングリコール1.0部及びケトプロフェン1部、更に2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部を溶解した溶液を加え攪拌した。次にジイソプロパノールアミン1.1部を精製水2.1:4部に溶解したものを加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例 7

カルボキシビニルポリマー（ハイビス和光 104；和光純薬工業特製）2.2部を精製水3.0部に膨潤させた。これにエチルアルコール3.5部及びジイソプロピルアジベート3部にケトプロフェン3部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部及びブチルヒドロキシトルエン0.1

2部を加え十分に攪拌分散を行なった。これに水酸化カリウム0.07部を精製水4.5:6.3部に溶解した溶液を攪拌しながら加え、全体が均一になるまで攪拌して消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例 10

ケトプロフェン3部をエタノール4.0部に溶解し、その中に2.4-ジヒドロキシベンゾフェノン（一般名：ベンゾレゾルシノール）1部、ブチレングリコール1.0部、セバシシ酸ジエチル2部、メチルセルロース0.8部を加え十分に攪拌分散を行なった。これに水酸化カリウム0.07部を精製水4.3:1.3部に溶解した溶液を攪拌しながら加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例 11

ケトプロフェン2部をエタノール4.9部に溶解し、その中に2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.6部、アジピン酸ジイソプロピル

部を溶解した溶液を加え攪拌した。

更に、これにヒドロキシプロピルセルロース1部をプロピレングリコール1.3部に溶解したものを加え攪拌した後、ジイソプロパノールアミン3部を精製水9.2部に溶解したものを加え、全体が均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛ゲル剤を得た。

実施例 8

ケトプロフェン7部をエタノール5.2部に溶解せしめ、その中に2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部を加えた。次にジイソプロピルアジベート4.0部を加え、全体が均一になるよう十分に攪拌して消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例 9

ケトプロフェン1部をエタノール3.8部に溶解し、その中に2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、プロピレングリコール1.2部、メチルセルロース0.8部及びセバシシ酸ジエチル

3.0部、アトコフェロール1部及びヒドロキシプロピルセルロース1.5部を加えて攪拌分散させ、更に、これに水1:5.9部を加え、全体が均一になるまで攪拌して消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例 12

ケトプロフェン0.5部、プロピレングリコール1.0部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.2部、モノラウリン酸ポリエチレングリコール（10 E. O.）1.0部、クロタミドン0.5部にアセトン2.0部、エチルアルコール2.0部を加えケトプロフェンを溶解したのち、水1.0部を加え、更にエタノールを加えて全量を1.0部とし、消炎鎮痛リニメント剤をえた。

実施例 13

ケトプロフェン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、アトコフェロール1部、クロタミドン1部及びポリエチレングリコール4.0部を1.0部、更にエタノール5.0部を

加えてケトプロフェンを溶解したのち、水5部を加え、更にイソプロピルアルコールを加えて全量を100部とし、消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例 14

ケトプロフェン2部、2,2-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.7部、モノラウリン酸ポリエチレングリコール(10 E. O.) 15部、クロタミトン2部、アジピン酸ジイソプロピル4部に、8-アセチル化塩基変性アルコールを加えて全量を100部とし、消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例 15

ケトプロフェン1部、プロピレングリコール10部および2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部にエタノール7.0部を加えてケトプロフェンを溶解したのち、水5部を加え、更にエタノールを加えて全量を100部とし、消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例 16

ケトプロフェン1部、2,2-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、ポリスチレン酸イソプロピル10部、鯨ロウ4部、ポリオキシエチレンラウリルエーテルリン酸ナトリウム2部、白色ワセリン82.5部を混合した。以下、実施例16と同様な方法で消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 19

ケトプロフェン5部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸1部、セバシン酸ジエチル10部、鯨ロウ5部、ポリオキシエチレンラウリルエーテルリン酸ナトリウム5部、白色ワセリン73.95部、パラオキシ安息香酸ブチル0.05部を混合した。以下、実施例16と同様な方法で消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 20

(A)：ケトプロフェン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、ステアリル

実施例 16

ケトプロフェン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、セバシン酸ジエチル10部、鯨ロウ5部、ポリオキシエチレンラウリルエーテルリン酸ナトリウム2部、白色ワセリン81.45部、パラオキシ安息香酸ブチル0.05部を混合し、加熱融解して40~100℃に保った。透明融解液となった後、ホモミキサで全体が均一になるよう混合した。その後攪拌しながら室温まで冷却して油性の消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 17

ケトプロフェン3部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部、アトコフェロール1部、セバシン酸ジエチル10部、鯨ロウ5部、ポリオキシエチレンラウリルエーテルリン酸ナトリウム4部、白色ワセリン75.95部、パラオキシ安息香酸ブチル0.05部を混合した。以下、実施例16と同様な方法で消炎鎮痛軟膏剤を得た。

アルコール4部、流動パラフィン4部、セタノール4部、白色ワセリン15部、ポリオキシエチレンセチルエーテル2部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合し、加熱融解して40~100℃に保った。

一方、(B)：水69.3部を40~100℃に保ち、(A)の融解液を(B)に加えホミキサーで全体が均一になるまで攪拌混合し、乳化した。乳化後、よく攪拌しながら室温まで冷却して乳剤性基剤の消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 21

(A)：ケトプロフェン3部、2,2-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部、アトコフェロール1部、セトステアリルアルコール10部、流動パラフィン5部、白色ワセリン10部、ポリオキシエチレンラウリルエーテル2.5部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合し、加熱融解して40~100℃に保った。

一方、(B)：水67.3部を40~100℃に

保ち、(A)の融解液を(B)に加えホモミキサーで全体が均一になるまで攪拌混合し、乳化した。乳化後よく攪拌しながら室温まで冷却して乳剤性基剤の消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 22

(A)：ケトプロフェン5部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸0.8部、セタノール4部、ステアリアルアルコール4部、白色ワセリン1.5部、流動パラフィン4部、ポリオキシエチレンセチルエーテル2部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合し、加熱融解して40～100℃に保った。

一方、(B)：水6.5部を40～100℃に保ち、(A)の融解液を(B)に加えホモミキサーで全体が均一になるまで攪拌混合し、乳化する。乳化後、よく攪拌しながら室温まで冷却して乳剤性基剤の消炎鎮痛軟膏剤を得た。

リエチレングリコールモノステアレート(ニッコールMY65)(日光ケミカルズ社製)1部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合した。これを前記の水を膨潤させたカルボキシビニルポリマーに添加し、水を減量して均一に乳化した。乳化後、ヤシ油脂肪酸ジエタノールアミド3部を、水1.1部に溶解したものを添加し、全体が均一になるまで十分に攪拌して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例 25

カルボキシビニルポリマー(ハイビス和光104)(和光純薬工業製)1部を水5.5部に膨潤させた。一方、パルミチン酸イソプロピル1.0部、セバシン酸ジエチル1.0部、2,2'-ジヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.2部及びデトコフェロール0.5部を混合し、これにケトプロフェン1部を溶解した後、更に、ポリオキシエチレンセチルエーテル(ニッコールBC-2)²⁰TX(日光ケミカルズ社製)2部、炭酸プロピレン

実施例 23

(A)：ケトプロフェン1部、シノキサート0.8部、ジ-tert-ブチルヒドロキシトルエン0.5部、セタノール4部、白色ワセリン1.0部、流動パラフィン7部、ポリオキシエチレンオレイルエーテル2部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合し、加熱融解して40～100℃に保った。

一方、(B)：水7.4.5部を40～100℃に保ち、(A)の融解液を(B)に加えホモミキサーで全体が均一になるまで攪拌混合し、乳化する。乳化後よく攪拌しながら室温まで冷却して乳剤性基剤の消炎鎮痛軟膏剤を得た。

実施例 24

カルボキシビニルポリマー(カーボボール940(グッドリッチケミカル社製))1部を水6.5部に膨潤させた。一方、ミリスチン酸イソプロピル1.0部とエタノール5部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.8部を混合し、これにケトプロフェン3部を溶解した後、更に、ホ

1.0部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部を混合した。これを前記の水を膨潤させたカルボキシビニルポリマーに添加し、ホモミキサーで均一に乳化した。乳化後、水酸化ナトリウム0.1部を水1.0部に溶解したものを添加し、全体が均一になるまで十分に攪拌して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例 26

ケトプロフェン1部をグリセリン5部に溶解し、カルボキシビニルポリマー(カーボボール940(グッドリッチケミカル社製))1部、精製水8.9.1部を加えて攪拌、膨潤させた後、ジソプロパノールアミン0.4部を加えて乳化させた。これに中鎖脂肪酸トリグリセリド(ODO[®]、日清製油社製)3部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部を添加混合して、消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例 27

(A)：ケトプロフェン1部をハッカ油1部に

50〜80℃にて加温して溶解した。これにステアリン酸5部、セタノール5部、流動パラフィン15部、白色ワセリン3部、ポリオキシエチレンソルビタンモノステアレート2部、ソルビタンモノステアレート0.6部及びパラオキシ安息香酸プロピル0.05部を加え、これを水浴上で約50〜80℃にて加温し混合した。

一方、(B)パラオキシ安息香酸メチル0.05部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、トリエタノールアミン1.0%水溶液3部、ラウリル硫酸ナトリウム0.1部及び精製水63.7部を水浴上で50〜80℃にて加温し、溶解した。(B)を(A)溶液に加え、十分に攪拌したあと冷却して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例28

(A)：グリセリンモノステアレート2.0部、ポリオキシエチレングリセリルモノオレエート4部を混合し、50〜70℃に保ちながらかきまぜ、これにケトプロフェン5部、ブチルバイドロキシ

アニソール0.02部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部を加えよく混合した。

一方、(B)：精製水62.83部にパラオキシ安息香酸メチル0.15部を溶解し、グリセリン7部を加えた。(B)に(A)の油層を少しずつ加え、全体が均一になるまで十分に攪拌して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例29

ケトプロフェン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、イソプロピルミリステート1.0部に溶解し、更にエタノール5部、カルボキシビニルポリマー1.5部を精製水50部に溶解したもの及びポリオキシエチレン(55)モノステアレート1部を精製水1.0部に溶解したものを添加して均一になるまで十分に攪拌した。その後、キシ油脂肪酸ジエタノールアミド3部を精製水1.0部に溶解したもの、及び精製水8部を加え、全体が均一になるまで十分に攪拌して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例30

(A)：ゼラチン5部、ソルビール1.0部、カオリン7部、精製水4.4部を混合容器に入れ、約50〜60℃にて溶解し、均一な分散液を得た。これにあらかじめ調製しておいたグリセリン2.5部、ポリアクリル酸ソーダ3部、カルボキシメチルセルロース3.5部の分散液を投入し、攪拌混合し均一な混合物を得た。

(B)：水浴上にクロタミトン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部及びケトプロフェン1部を加温混合攪拌し、均一な分散液を得た。次に(A)に(B)を投入、攪拌し均一な混合物を得た。これを展延紙を用いて厚さ2mmに塗布、この後ポリプロピレンフィルムに覆い、所望の大きさに切断して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例31

精製水4.65部、ゼラチン8部、ケイ酸アルミニウム1.0部、ポリビニルアルコール3.5部を混

合容器に入れ、約50〜60℃にて溶解し、均一な分散液を得た。これにあらかじめ調製しておいたグリセリン2.5部、カルボキシメチルセルロース3部の分散液を投入、攪拌混合し、均一な混合物を得た。次にこの混合物にケトプロフェン3部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部を投入、攪拌混合し、均一な混合物を得た。これを展延紙を用いて厚さ1mmに塗布、この後ポリエチレンフィルムにて覆い、所望の大きさに切断して消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例32

(1)ケトプロフェン	1部
(2)ゼラチン	6部
(3)ポリビニルアルコール	1部
(4)ポリアクリル酸ナトリウム	3部
(5)カルボキシビニルポリマー	5部
(6)2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン	0.5部
(7)グリセリン	4.5部

00 水	39 部
------	------

合計	100 部
----	-------

上記各成分を実施例30及び31に記載と同様な方法で混合し、その後支持体上に展延して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例33

(1) ケトプロフェン	2 部
(2) ポリアクリル酸	4 部
(3) 硝酸アルミニウム	1 部
(4) グリセリン	24 部
(5) ゼラチン	4 部
(6) 2,2'-ジヒドロキシ-4- メトキシベンゾフェノン	1 部
00 水	64.0 部

合計	100 部
----	-------

上記各成分を実施例30及び31に記載と同様な方法で混合し、その後支持体上に展延して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

(0) カオリン	5.2 部
(0) グリセリン	4.1 部
合計	100 部

上記各成分を実施例30及び31に記載と同様な方法で混合し、その後支持体上に展延して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例36

(1) ケトプロフェン	1 部
(2) ベンジルアルコール	1 部
(3) ポリソルベート80	2 部
(4) 2-ヒドロキシ-4- メトキシベンゾフェノン	0.5 部
(5) 酸化亜鉛	8 部
(6) ポリエチレングリコール400	3 部
(7) ゼラチン	3 部
(8) ポリアクリル酸ナトリウム	1 部
(9) ソルビット液(7.0%)	15 部
(0) グリセリン	10 部
(1) カルボキシニルポリマー	1 部

実施例34

(1) ポリアクリル酸ナトリウム	1 部
(2) トリエタノールアミン	1 部
(3) ツウイーン80	70 部
(4) プロピレングリコール	8 部
(5) ケトプロフェン	5 部
(6) 2-ヒドロキシ-4- メトキシベンゾフェノン	2 部
00 水	13 部
合計	100 部

上記各成分を実施例30及び31に記載と同様な方法で混合し、その後支持体上に展延して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例35

(1) ケトプロフェン	0.5 部
(2) ハンガ油	3 部
(3) 2,2'-ジヒドロキシ-4- メトキシベンゾフェノン	0.5 部
(4) サリチル酸グリコール	3 部

(2) カルボキシメチルセルロース ナトリウム	2 部
(3) 精製水	52.5 部
合計	100 部

上記各成分を実施例30及び31に記載と同様な方法で混合し、その後支持体上に展延して、消炎鎮痛湿布剤を得た。

実施例37

ポリエチレングリコールモノステアレート2.35部、さらにミツウ7部に中鎖脂肪酸トリグリセリド8.5.15部を加え、約60~70℃に加温し溶解混合した。これにケトプロフェン5部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部を加え、更に75~85℃まで加温し、攪拌しながら完全に溶解させた。溶解後、直ちに40℃前後に急冷し、同温度に保ちながら脱泡した後、ソフトゼラチンカプセル充填機を用いてカプセル充填して、消炎鎮痛坐剤を得た。

実施例 3 8

ポリエチレングリコール 4 0.0 を 5 部、さらしミツロウ 8 部、ソルビタンセスキオレエート 3.49 部に中鎖脂肪酸トリグリセリド 8 0 部を加え、約 60 ~ 70 °C に加温し、溶解混合した。これにケトプロフェン 3 部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン 0.5 部、ジブチルヒドロキシトルエン 0.0 1 部を加え、更に 7.5 ~ 8.5 °C で加温し、攪拌しながら完全溶解させた。以下、実施例 3 7 に記載と同様な方法で消炎鎮痛剤を得た。

実施例 3 9

カンフル 4.5 部、メントール 4 部、ケトプロフェン 3 部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン 1 部をエタノール 3 2.5 部に溶解し、これに水 2 6 部を加えたものをエアゾール容器に充填し、次いでタルク 4 部を加えた原液を調製し、噴射剤としてジメチルエーテル 1 3 部と液化石油ガス 1 2 部との混合物を圧入したのち、ステム孔径 0.4 mm のバルブ孔径 0.6 mm のペーパーカップ

径 0.4 mm のバルブを装着し、次いで孔径 0.4 mm のメカニカルブレイクアップ付のボタンを装着して消炎鎮痛エアゾール剤を得た。

実施例 4 0

カンフル 4.5 部、ジフェニヒドラミン 0.4 部、メントール 4.5 部、ケトプロフェン 1 部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン 0.5 部及びブートコフェノール 1 部をエタノール 3 0.1 部に溶解し、これに水 2 4 部を加えたものをエアゾール容器に充填し、次いでジメチルエーテル 2 5 部と液化石油ガス 9 部との混合物を圧入した。以下、実施例 3 9 に記載と同様な方法で消炎鎮痛エアゾール剤を得た。

実施例 4 1

ケトプロフェン	0.1 部
2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン	0.0 5 部
白色ワセリン	1 0 部

流動パラフィン	8 9.8 5 部
全量	1 0 0 部

上記各成分を均一になるまで攪拌して、消炎鎮痛点眼剤を得た。

実施例 4 2

ケトプロフェン	0.5 部
ホウ酸	1.6 部
ホウ砂	適量
2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン	0.1 部
水	残量
全量	1 0 0 部

上記各成分を均一になるまで攪拌し、pH 7.4 の消炎鎮痛点眼剤を得た。

実施例 4 3

ケトプロフェンナトリウム	0.5 部
2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン	

アルギニン	0.1 部
1 N 塩酸	0.3 2 部
水	適量
全量	1 0 0 部

上記各成分を均一になるまで攪拌して、pH 7.4 の消炎鎮痛点眼剤を得た。

実施例 4 4

ステレン-イソブレン-スチレンテレブロック共重合体 (カリフレック STR 1107, シェル化学社製) 1 2 部、ステレン-イソブレン-スチレンラジアルテレブロック共重合体 (ソルブレン # 18, フィリップス・ベトロリアム社製) 8 部、水添ロジンエステル (エステルガム H, 荒川化学製) 1 2 部、ロジン酸性マレイン酸樹脂 (マルキード 2 号-N, 荒川化学製) 3 部、流動パラフィン (クリストール 355, エッソスタンダード石油製) 5 7.5 部を産業ガス気流中で溶解し、この溶解物 (約 150 °C) を約 120 °C でまで冷却した後、ケトプロフェン 5 部及び 2-ヒドロキシ-4-

ニメトキシベンゾフェノン2.5部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて不織布上に厚さ約50 μ に展延した後、離型処理を施した剥離紙で覆い所望の大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例45

スチレン-イソブレン-スチレンテレブロック共重合体(カリフレックスTR1107、シェル化学社製)22.5部、流動パラフィン(和光純薬製)43.5部、水添ロジエステル(エステルガムH、荒川化学製)28部を窒素ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150 $^{\circ}$ C)を約120 $^{\circ}$ Cまで冷却した後、ケトプロフェン5部及び2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて非起毛の布の支持体上に厚さ約50 μ に展延した後、ポリエチレンフィルムで覆い所望の大きさに切断し消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例46

スチレン-イソブレン-スチレンテレブロック共重合体(カリフレックスTR1107、シェル化学社製)20部、流動パラフィン(クリストール355、エッソスタンダード社製)40部、水添ロジエステル(エステルガムH、荒川化学製)12部、ロジエ酸性マレイン酸樹脂(マルキード2号-N、荒川化学製)18部を窒素ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150 $^{\circ}$ C)を約120 $^{\circ}$ Cに冷却した後、ケトプロフェン5部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部及びフィートコフェロール4部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いてスプ上に厚さ約90 μ に展延した後、離型処理を施したポリプロピレンフィルムで覆い所望の大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例47

スチレン-イソブレン-スチレンテレブロック共重合体(カリフレックスTR1107、シェル

化学社製)22部、流動パラフィン(クリストール355、エッソスタンダード社製)42部、水添ロジエステル(エステルガムH、荒川化学製)27.5部を窒素ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150 $^{\circ}$ C)を約120 $^{\circ}$ Cに冷却した後、ケトプロフェン5部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1.5部及びフィートコフェロール2部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて離型紙上に厚さ50 μ に展延、冷却後、厚さ60 μ のポリエチレンフィルム上に転写し、所望の大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例48

スチレン-イソブレン-スチレンラジアルテレブロック共重合体(ソルブレン418、フィリッブス-ベトロリウム社製)28.5部、流動パラフィン(クリストール355、エッソスタンダード石油社製)37.5部、水添ロジエステル(エステルガムH、荒川化学製)23部、ロジエ酸性マ

レイン酸樹脂(マルキード2号-N、荒川化学製)6部を窒素ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150 $^{\circ}$ C)を約120 $^{\circ}$ Cに冷却した後、ケトプロフェン4部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて不織布上に厚さ約50 μ に展延した後、ポリプロピレンフィルムで覆い所望の大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例49

スチレン-イソブレン-スチレンラジアルテレブロック共重合体(ソルブレン418、フィリッブス-ベトロリウム社製)25部、スチレン-アタジエン-スチレンラジアルテレブロック共重合体(ソルブレンT-431、旭化成社製)2部、流動パラフィン(クリストール70、エッソスタンダード石油社製)41.5部、水添ロジエステル(エステルガムH、荒川化学製)18.5部、ロジエ酸性マレイン酸樹脂(マルキード2号-N、荒川化学製)11部を窒素ガス気流中で溶解し、

この溶解物(約150℃)を約120℃に冷却した後、ケトプロフェン1部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン-5-スルホン酸1部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて起毛布上に厚さ約90μに展延した後、ポリエチレンフィルムで覆い所望の大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例5-0

スチレン-イソブレン-スチレンラジアルテラブロック共重合体(ソルブレン418、フィリップス・ベトロリアム社製)16部、スチレン-ブタジエン-スチレンラジアルテラブロック共重合体(ソルブレンT-414、日本エラストマー社製)1.5部、流動パラフィン(クリストール70、エッソスタンダード石油社製)41.5部、ロジン変性マレイン酸樹脂(マルキード2号-N、荒川化学製)2.5部を薬液ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150℃)を約120℃に冷却した後、ケトプロフェン3部、2-ヒドロキシ-4-メト

キシベンゾフェノン1.5部、4-メントール6.5部、dl-カンフル5部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて起毛布の上に厚さ約1mmに展延した後、裏面をセロファンフィルムで覆い所望の大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例5-1

スチレン-イソブレン-スチレンラジアルテラブロック共重合体(ソルブレン418、フィリップス・ベトロリアム社製)21部、流動パラフィン(和光化学製)45.5部、ロジン変性マレイン酸樹脂(マルキード2号-N、荒川化学製)2.0部、水添ロジンエステル(エステルガムH、荒川化学製)2.0部を薬液ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150℃)を約120℃に冷却した後、ケトプロフェン4部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン3部、トウガラシエキス4.5部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて起毛布の上に厚さ約1mmに展延した

後、裏面をポリエチレンフィルムで覆い所望の大きさに切断して消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例5-2

スチレン-イソブレン-スチレンテラブロック共重合体(カリフレックスTR-1107、シェル化学社製)3.5部、流動パラフィン(クリストール-355、エッソスタンダード社製)3.5部、水添ロジンエステル(エステルガムH、荒川化学製)16.5部を薬液ガス気流中で溶解し、この溶解物(約150℃)を約120℃まで冷却した後、ハッカ油3部、ケトプロフェン2部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン1部、エートコフェロール3部、4-メントール3部、dl-カンフル1部、チモール0.5部を添加、混合して均一なものとした。これを展延機を用いて25μポリエチレンフィルム上に塗布した。その後離型処理した樹脂紙で覆い所望の大きさに切って消炎鎮痛貼付薬を得た。

実施例5-3

カルボキシビニルポリマー(カーボール940(グッドリッチケミカル社製))1部を水61.3部に懸濁させた。一方、クロタミトン5部、2-オクチルデカノール10部、プロピルグリセロール5部、ポリオキシエチレン(20)セチルエーテル(ニッコールBC-20TX)3部を混合し、これに2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン0.5部、パラオキシ安息香酸メチル0.2部及びケトプロフェン3部を加え70〜80℃に加熱して溶解した。これを室温まで冷却した後、前記の水に懸濁させたカルボキシビニルポリマーに添加し、ホモミキサーで均一に乳化した後、ジイソプロパノールアミン1部を水10部に溶解したものを添加し、全体が均一になるまで十分に攪拌して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例5-4

カルボキシビニルポリマー(カーボール940(グッドリッチケミカル社製))1部を水54.3

部に溶解させた。一方、セバシン酸ジホソプロピル 10 部、2-ヘキシルデカノール 10 部、1,3-ブチレングリコール 5 部、ポリオキシエチレン (60) 硬化ヒマシ油 (ニッコール、HCO-60) 5 部を混合し、これに 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン 0.5 部、パラオキシ安息香酸メチル 0.2 部、及びケトプロフェン 3 部を加え、70~80℃に加熱溶解した。これを室温まで冷却した後、前記の水に溶解させたカルボキシビニルポリマーに添加し、ホモミキサーで均一に乳化した後、ジソプロパノールアミン 1 部を水 10 部に溶解したものを添加し、全体が均一になるまで十分に攪拌して消炎鎮痛クリーム剤を得た。

実施例 55

ケトプロフェン 3 部をリナリル炭性アルコール 35 部に溶解し、その中に 2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン 1 部、ポリオキシエチレンオレイルエーテル 5 部、ハッカ油 0.5 部を加え、更に精製水を加えて全量を 100 部とし、全体が

均一になるまで十分攪拌して消炎鎮痛リニメント剤を得た。

実施例 56

(A) : セラチン 5 部、ソルビトール 10 部、ポリビニルアルコール 3 部、カオリン 5 部、精製水 44.4 部を混合機内に入れ、約 50~60℃にて溶解、均一なる分散液を得る。これにあらかじめ調整しておいたグリセリン 2.5 部、ポリアクリル酸ソーダ 3 部、メチルビニルエーテル無水マレイン酸共重合体 3 部の分散液を投入し、攪拌混合し均一な練合物を得た。

(B) : 水浴上にてハッカ油 1 部、2-ヒドロキシ-4-メトキシベンゾフェノン 0.5 部及びケトプロフェン 0.1 部を加温混合し均一な溶解液を得る。

次に (A) に (B) を投入、攪拌し均一な練合物を得た。これを展延機を用いて厚さ 1mm (メリヤス布地) に塗布。この後ポリプロピレンフィルムにて覆い所望の大きさに切断して消炎鎮痛湿布

剤を得た。

手続補正書

昭和 60 年 3 月 8 日

特許庁長官 志賀 学 殿

1. 事件の表示

昭和 58 年 特許第 197383 号

2. 発明の名称

安定なケトプロフェン含有外用製剤

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 佐賀県鳥栖市田代大宮町 408 番地 (〒841)

名称 久光製薬株式会社

代表者 中富博隆

(連絡先 電 09428-3-2101 山川秀徳)

4. 補正命令の日付

昭和 60 年 2 月 22 日
(昭和 60 年 3 月 5 日発送)

5. 補正の対象

昭和 60 年 1 月 18 日付提出の手続補正書の補正の対象の欄

6. 補正の内容

別紙の通り

特許出願人 久光製薬株式会社
代表者 中富博隆



昭和60年 1月18日

特許庁長官 志賀 学 殿

1. 事件の表示

昭和58年 特許願第197383号

2. 発明の名称

安定なケトプロフェン含有外用製剤

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 佐賀県島田市田代大宮町408番地(〒841)

名称 ヒノカキ工業株式会社

代表者 中田 厚 隆

(連絡先 電話 09428-3-2101 山川秀雄)



4. 補正命令の日付 自発

5. 補正の対象

明細書全文

6. 補正の内容

別紙の通り

**This Page is Inserted by IFW Indexing and Scanning
Operations and is not part of the Official Record**

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

- ☒ **BLACK BORDERS**
- ☐ **IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES**
- ☐ **FADED TEXT OR DRAWING**
- ☐ **BLURRED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING**
- ☐ **SKEWED/SLANTED IMAGES**
- ☐ **COLOR OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS**
- ☐ **GRAY SCALE DOCUMENTS**
- ☐ **LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT**
- ☐ **REFERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY**
- ☐ **OTHER:** _____

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

As rescanning these documents will not correct the image problems checked, please do not report these problems to the IFW Image Problem Mailbox.